

りしんねんだいき

離神年代記

最終話

選 択

秋本カイ

画戸谷展洋

タズ

風が強かった。ガタガタと雨戸が鳴る。太郎が帰って来たのではないかと、何度も外へ出てみた。タズには、わかっていた。太郎は、明彦を呼びに行ったのだ。その間に死んでしまった。

(なんて、悲しい親子だろう)

伽耶子の遺体を連れ帰ることはできなかった。殺人事件なのである。例え遺体であっても調べられる。

がたん、と大きな音がした。タズはいてもたってもいられず、また外に出た。誰もいない。誰一人いない。

暗い森を仰ぎ見る。ヒューヒューと風が渡り、ゴーゴーと木が騒ぐ。その中を、微かに、時折途絶えながらも、細く長く続く、昔の音が聞こえる気がした。

「このかあく、このかあく」

髪結床の壊れそうな小屋に住み着いた女は、森に向かって、毎日娘の名を呼んでいた。娘も娘で飽きもせず、毎日森を駆け回っていた。

「このかあく、このかあく」

母鹿が仔鹿を呼ぶような、母羊が仔羊を案ずるような、どこか不安を抱えた声だった。そして、それは現実となった。四十年以上も前の話である。

発見したのはタズだった。新芽も青葉も食欲に光合成を繰り返

返し、みるみる森を濃い緑に染め上げる。そんな季節のことだった。

タズは、森のはずれの茂みから、地面の上に、によつきりと突き出た足を見た。土に汚れた小さな足。ぴくりとも動かさず、十本の可愛らしい指が空に向かって突き立っている。

恐る恐る茂みに手を伸ばし、搔き分けると、少女が仰向けに倒れていた。まだ、女にならぬべったりとした腹、陰毛も生え揃わぬ股。内腿には血が流れていた。下半身は剥き出しなのに、上半身には、白いブラウスを着ていた。ぽかんと目を開けている。口も開いたままで、端に血がこびり付いている。時が止まって、お面になった顔だった。

タズは腰を抜かした。お芝居で見たことはあったが、本当に驚いたとき、人は腰を抜かすのだ。

唇が震えるだけで、口を開けても『アワアワ』と鳴るばかり。言葉は出て来なかった。

タズに気付いた夫人が駆け付けた。少女の下半身を上着で包み、女中衆を呼んで、部屋に運ばせた。

先代の海老沢先生が呼ばれて、手当てをした。

大騒ぎに立ち回る人々を見つめながら、

(何も無かったことになるのだらう)

と、タズは思った。

(誰だって、そう思う)

敷地内で、白痴の少女が強姦された。少女は人とも扱われな

い。白居家の人間が、手を差し伸べたので、やっと生き延びた親子である。白居家の情けがなければ、とうに野垂れ死んでいただはずだ。

少女は、毎日森で遊んでいた。土の上でも眠っていた。木に登って、草に寝転んで、猫や犬と変わらない。こんな風に扱われても、文句を言う言葉も知らない。

（それにしたって、そんなかわいいそうな子どもを、こんな目にあわせるなんて）

タズは憤りながらもわかっていった。それが人の世の習いである。これは仕方のないことにしかならない……はずだった。

だのに、少女は妊娠した。

大学を卒業したばかりの、白居家の一人息子、嘉一郎が、自分が犯人であると名乗り出た。

タズは、きつちりと木戸を閉め、部屋に戻った。伽耶子が死んで、今晩は妙に過去が降って来る。しつかりと仕舞い込んで鍵を掛けたはずの記憶が、ふつつつと脳裏に浮かび上がってくる。

小学校を出て、すぐに白居家へ奉公に出された。小卒である。

その小学校さえ、たいして通ってはいなかった。子守りや農作業の手伝いが生活の中心だった。小学校に行っても行かなくても、学校の教室で気に留めてくれる人間もいなかったし、家で

気付いてくれる者もなかった。大勢に囲まれて、目立たないまま何もかも見過ごされた。

白居家へ奉公に上がっても、同じ事。着いた日のうちに、嘉一郎の乳母を務める富子の手伝いを命じられた。その富子だけがタズを気に留め、可愛がってくれた。

二歳の幼児であった嘉一郎。それが青年となり、少女を犯したのである。タズにとつて衝撃だった。その時すでに、三十を過ぎながら、タズは生娘であった。捨てられた人形のような少女の姿はタズの心を深く傷つけた。

妊娠のわかった後、深夜、白居家の広間に多くの人間が集まった。あの時の感覚は四十年以上たった今もはっきりと覚えていた。先代の海老沢先生、菩提寺の住職、白居家の親戚一同、周辺の家の人々、見知った顔ばかりだった。ほとんど会話はなかった。会話など必要なかった。共通の理解があった。

（あの気狂いの娘に子を産ませねばならぬ。それが我々の使命だ）

わかっていたことを、なぜわかっていたのかと問われても、返答のしようもない。みんなわかっていたし、互いに、わかっていることを知っていた。

もし、休場に、こんな話をしたら、どうしてわかっていたのかと問い詰めるだろうか？

休場は、おかしな人物である。

「葉子さんに書くことを頼まれたのです」

と言うが、書くことというのは一体なんだろう。

(伽耶子さん、海老沢先生、雪那さん、はては弓子さんや自分
にまで、話を聞きに来る。福島さんの所へも会いに行っ
た、と言っていた。本当に驚いた。そんなことをしてなんにな
るのだろう)

問い詰めるというのは、休場の人柄とは違うかもしれない。
タズが『おうちのことは話せない』と言うと、『職業的守秘義務
つてもんですかね』と受け流し、しつこくは尋ねない。家事の
ことやら、世間の世話話やら、女同士が茶請けにしゃべるよう
なことに、上手な相槌を打って耳を傾ける。

それにしても、あんなおかしな気持ちに突き動かされたのは、
一生にあの一回きりである。

打ち合わせた訳でもないのに、少女の戸籍を作ったり、髪結
床の老婆二人を遠くの施設に入れたり、各自が自分にできるこ
とを行なった。皆が申し合わせたように、少女を幸枝奥様と戸
籍の名で呼んだ。それでも少女が逃げ帰ろうとすると、監禁同
然に閉じ込めて、赤ん坊を産ませた。タズは、ずっと少女に付
き添っていた。食べさせたり寝かせたり、それは少女の身を案
じての事ではない。赤ん坊を流産させてはならないという、切
羽詰った思いがあった。

そして、あの出産。動物じみた咆哮をあげる少女。なぜ自分
の身にこのようなことが起こるのか！ この苦痛はなんである
のか？ 自分の置かれた状況のわからない小動物が、周りのす

べてに歯を剥くように、彼女は喚き続けた。事実、難産だった。
やっと生き延びた少女は産んだ子を一度も抱きあげなかった。
無理に抱かせようとすると、地べたに投げ捨てようとした。

タズは全てが恐ろしかった。

潮が引くように、人々の思いは鎮まった。赤ん坊が生まれた
からであろうか？ そうではない。そうではないと思う。

赤ん坊が違ったのだ。皆が待っていたのはもつと違う赤ん坊
のはずだった。

ひとつだけの慰めは生まれ出た葉子が可哀想な子ではなかつ
たことである。子どもの頃から美しく、頭が良く、毅然として
いた。母に抱かれもしなかつた悲しさはどこにもなかつた。人
の心のよくわかる、誰もが愛さずにはいられない子だった。

(嘉一郎坊ちゃんは、どうして葉子という名を付けたのだろ
う?)

茂みから生えたような二本の足。草いきれの中に打ち捨てら
れた人形ひとがた。タズの心に強く焼き付いたのは、少女の体を覆い隠
していた濃い緑、緑の葉。

(美しい花の名ではなく、なぜ葉子なのだろう)

そこまで考えてタズは、いつも自分の記憶が間違っていたの
かと疑う。葉子の誕生日は、五月である。ということは、事件
は秋のことであろう。それなのに、あの青々とした草むら。貪
欲な低木の緑。季節が間違っている。

でもそれを言うなら、葉子の死んだ日の夜桜だって、十二月

の出来事だ。

あのとき…… 庭で葉子が破水した。海老沢先生が駆けつけて、部屋に運び込んだ。もうすでに、赤ん坊の頭が出ているような状態だった。赤ん坊はすぐに生まれた。難産でも何でもなかった。なのに、母親は死んだ。葉子は死んだ。そして、あれほど姉に張り付いていた弟の明彦は、なぜかその場になかった。彼が駆けつけた時、生まれた赤ん坊を伽耶子が慌てて、看護婦から取り上げた。タズに渡して、奥へ連れて行くように言った。直後、看護婦が倒れた。伽耶子は何か看護婦に異変を感じて、赤ん坊を取り返したのだろうか。可哀想に、看護婦はそのまま死んでしまったらしい。

でも、そこでもおかしいのが、看護婦が海老沢病院の中で仕事中に死んだことになっていることだ。翌日、すべての桜の散ってしまった庭先で、海老沢先生にそう言われた。タズは、ただ頷いた。共犯者となった。

白居家の子どもたちを生んだ気狂いの女、このか。彼女が住み、その長女の葉子が住み、次女の伽耶子が住んだ離れの間。縁先に立つ桜の古木。あの木には、何が宿っているのだろう。

このかの死んだ時にも、あの花は咲いていた。散った桜の花弁がこのかの髪にたくさんついていてた。

死んだこのかのお腹に、伽耶子がいたというのだが、そんなことはうそだと思った。赤ん坊は未熟児で生まれたので、海老沢病院に預けられていると言われた。でも、何ヶ月も経って、

白居家に連れて来られた赤ん坊は、まだ生まれたてにしか見えなかった。第一、このかが妊娠していたとはとても思えない。

なのに、伽耶子はこのかそっくりだ。このかも伽耶子のように、大事にしてくれる理解者がそばにいれば、あんな小動物のような娘にはならなかったのだろうか。無理やり、子どもを産ませられたりしなければ、あそこまで狂ってしまうこともなかったのかもしれない。

幸いなことに、伽耶子も気狂いの気はあったが、傍に、いつも明彦と葉子がついていた。伽耶子を守っていた。

特に、明彦と伽耶子が、二人で佇んでいる姿は、不思議だった。この世のものとも思われぬ、木々も、自然も、時も、すべてが二人に頭を垂れているような気がした。

タズは、何度目かのため息をついた。こんなに昔のことばかり思い出すなんて、自分はなんと年老いてしまったことだろう。そう思いながらも、ぐるりと部屋を見回せば、また、様々な思いが蘇る。

タズはこの女中部屋が好きだった。勝手口の土間から繋がる四畳ほどの板敷きの部屋である。使用人が皆いなくなつた時、葉子にもっと広くて日当たりの良い畳間に移る事を勧められた。ここが気に入っているからと断った。その後、伽耶子と太郎だけの家族になってからは、番犬のように裏口を守る気持ち

がここに留まらせた。多くの人間が出入りするようになると、皆が裏戸を叩く。タズが出て行くと用件を伝える。伽耶子に用のある人間も、おおよそがどういいう事で訪ねてきたのかをタズに話した。

七十を過ぎてタズは元気だった。十二の時から毎日毎日、この広い屋敷を掃除してきたのである。買い物をして、食事の支度をした。お金のことも任された。葉子さんが何でもする人だったのに、伽耶子さんは何もしない人である。

そして、豆腐屋のような、いつのまにかここに居つく者があらわれた。なぜここに住み始めたのかもわからない。それに、本多病院の関係者がいる。お金ももらわず、人の世話をする人間たちである。様々な事情で人が増えて、仕事も、なにもかも、分担するようになった。

その上コウタのように、異国の人間まで訪ねて来る。雪那や瑛佑の知り合いらしいが、やっぱりタズにはよくわからない。彼らは、この森に住みつきはしなかったが、果たしてどこを寝ぐらにしているのか、どんな用があるのか、たまたま姿をみせる。どんどん日本語が上手になっていく。

タズの物思いを遮って、がたと戸が鳴った。

(どうせ、また強風に煽られて、折れた枝でもぶつかっただろう) と思ってみたが、やはり、腰を上げずにはいられない。

「ドンドン、ドンドン」

(違う)

音は、確かに来訪を告げている。

(太郎ぼっちゃん！)

慌てて戸を開けた。

そこに立っていたのは、明彦だった。

不思議だった。すぐに、わかった。目の前に立っているのは、昔の明彦である。葉子が死んで、太郎が成長して、伽耶子が死んだ。でも、今、そこに立っているのは、そうしたことの起こる前の明彦だった。

「タズさん」

昔の声で、昔のように、呼んだ。彼の上に十二年の歳月は流れていない。不安定な目、表情、立ち姿。二十代の明彦はいつも何かに怯えていた。いや、彼はもともと、生まれた時から、不安気だった。この世界におずおずと生きていた。

「タズさん」

もう一度、呼んだ。

体がぐらりと揺れて、戸口に縫すりつくように手を伸ばした。

折った膝が地面につく。タズは、明彦に触れた。

(冷たい！)

肩を貸しても、とても奥の部屋までは、運べそうもなかった。仕方なかった。とにかく、この冷え切った体を休ませねばならない。タズは、自分の女中部屋に明彦を入れた。

同じ女中仲間の富子以外、誰もこの部屋には入れたことがな

いの。

奥から布団やら寝巻きやらを運んで来たかったが、

「タズさん」

明彦が不安気にタズを呼ぶ。血の気のない顔が、タズの気持ちも不安にする。

仕方なかった。明彦を自分の布団に寝かせた。

明彦とは、この家の他の家族に比べ、一番関わる事が少なかった。若奥様となった狂女は、一度も葉子を抱かなかったのに、明彦のことは片時も手放さなかった。そして、三歳で母を亡くした明彦は、その後、ずっと姉である葉子といっしょだった。

伽耶子が少し大きくなると、今度はこの妹が兄である明彦について回った。あの日、葉子が死んで、明彦が壊れてしまつてからは、友康がつきつきりで世話をしている。

「友康さんが死んだ」

明彦が唐突に言った。

「伽耶子が迎えに来たのに、友康さんがこの手を掴んだ。この手を掴んで引き止めたのに、自分は死んでしまうなんて」

布団の中から、右手を出して、宙に掲げた。電燈の灯りにひらひら揺れて、明彦の白い顔に、微妙なニュアンスの影をつくる。

「姉さんも死んでしまったんだね」

十二年も前のことである。十二年は遠い。でも、おそらく明彦にとっては昨日のことなのだろう。

「約束したのに。いっしょにいてくれると言ったのに」

タズは、その蝶のように羽ばたく手を握った。

「そんなこと言ってはいけません。葉子さんがどんなに心残りだったか。あなたを残して逝くことが、どんなに心残りだったか。友康がずっとあなたを守っていたことも忘れてはいけません」

明彦は目を瞑った。それきり何も言わない。

タズは握りしめた明彦の手を、そっと布団の中に戻そうとした。その時、タズは感じた。

(あの時と同じだ)

白居家の広間に集まった時。自分が今、何をなすべきかを明確に理解していたあの夜。でも……

(こんなことはありえない。こんなことには従えない！)

タズは、明彦から視線を逸らして、立ち上がろうとした。

(自分は七十を過ぎた、老婆なのだ)

「タズさん」

目を瞑ったまま、うわごとのように、明彦が呼ぶ。

(この人には、もう誰もいない。だから、ここに帰って来た)

「タズさん」

(だめだ、それにしたって、自分でいいはずがない。そんなことは犬畜生の行いだ！)

布団に戻した明彦の手が、タズを追って来た。立ち上がろうとする彼女の服の端を掴んだ。

「タズさん」

明彦が目を開けた。タズを見る。

「なぜそんなふうに分かたしめをするの？ 年老いているから？ 財産を築かなかつたから？ 家族を作らなかつたから？ 僕にはいつも人間のいろいろなことが識別できなかった。個体差も心の景色も。でも、あなたがたくさんの人を育み、尽くしてきたことは知っている」

（何を言われているのかよくわからない）

「おかしな偏見だ。母性が美しく、女であることが醜いなんて。女であつたから、子どもが生まれ、母性が育つのに」

（見抜かれている）

「囚われることはない。人の枠に囚われるな。そんな必要はない。僕にそんな必要はない。今、僕には、年老いたあなただけではなく、生まれたときからのすべてのあなたが見えている」

「なぜ、そんな事を言うの」

もうだめだった。どうにもならない。

タズは、明彦に唇を合わせた。

男に手を握られたり、キスされたりしたことはあつたが、タズはあまりに頑なだった。全てを拒絶して、処女のまま生きてきた。このまま死んでいくはずだった。

それが、今自ら、男の体に触れている。唇の感触が、男の体温が、タズの子宮を熱くした。下半身が明彦を求めている。初めてか、やみくもなタズを、明彦がゆるやかに包み込む。

（生まれたばかりのときから？ いや…… 生まれる前のあなたさえ見える。遠いはじまり。人は僕を捕えるために創られた。さようなら、伽耶子。罫にはまつた僕を捨てて行け）

その夜

海老沢は、伽耶子の最期を看取つた。あまりに突然の死だった。考えがまとまらない。なぜこんなことになつたのか？ どのボタンを掛け違えたのか？ もっと、打つ手はなかつたのか？ 混乱していた。それでも、

（いや、今はそんな足踏みをしている時じゃない。この先、やらなくてはならないことがある。差し迫つたことばかりだ）

そう自分に言い聞かせた。言い聞かせねばならなかつた。

海老沢は、そうと、病室のドアを開け、中に滑り込んだ。ベッドの上の患者は、それでもいつもの目聡さで、視線をこちらへ向ける。

弓子は、やっと三日前に入院した。海老沢には、あれほど何もかもお見通しのヨリが、なぜ弓子のことには、これほど迂闊なのか不思議だった。彼女が膵臓癌とわかつたのは、半年も前のことである。

会社が大変な時だから夫に心配をかけたくない、絶対に笹原には言わないでくれ、と口止めされた。笹原が辞任して、家に

居るようになる、今は夫をゆっくりさせたい、うちにいるのだからいくらでも話す時間はある、タイムリングを見て自分の口から話したい、と言われた。

そして、三日前、弓子は、亜子と共に突然病院にやってきた。

「これから、いろいろ大変なことになるから、亜子を福島の家に預けてくるように言われたんです。私もしばらく、そちらで「厄介になるように」と」

亜子の祖父は、去年亡くなっており、今は広い家に祖母、森和子が一人で暮している。亜子を引き取ってから、和子と弓子の間には頻繁な行き来があり、亜子と一人で泊まりに行くのは、不自然なことではなかった。すでに秘書ではないのに、石渡多枝が相変わらず乗り物の手配等の世話をやいてくれた。

けれど、弓子が行かなかった。笹原には黙って海老沢病院に来た。亜子のは、多枝に送り届けてくれるように頼んだ。

それほど、病状は逼迫ひびくしていた。よく普通に振る舞っていたものだと、海老沢は舌を巻いた。弓子の人生はずっとこんな風だったのだろうか？

亜子は弓子を心配して、一日伸ばしに福島へ行くのを先送りにし、結局この事件に巻き込まれてしまった。

(ヨリの言った通りに、福島へ送り届けておけば……)
『ヨリの言う事は、いつも正しい』と海老沢は思った。

今、ベッドに寝たきりになっている弓子の耳には、笹原の逮捕も、亜子の目の前で伽耶子が殺された事も届いていない。亜

子は、昨日多枝が、ちゃんと祖母森和子のもとに、送り届けたことになっている。

「痛みはどうですか？ 苦しくないですか？」

海老沢が近付いて声をかけると、弓子は微笑んだ。

昨夜は、一晩中痛みと呼吸不全で、生死の境を彷徨っていた。

我慢に我慢を重ねた分、体を横たえた途端、一挙に病気に追いつかれた感じだ。今が、最後の小康状態であろうか。すでに尿の袋に排泄されるものもなく、血圧も脈拍も低いラインのままである。このラインの映像は、ナースセンターに繋がっている。ナースらは弓子を助ける為ではなく、最期を看取るために、時折、その数値とラインに目を向ける。

呼吸器を外してくれるように、弓子の手が動く。

外すと不思議なほどはつきりとした視線で、海老沢を見つめた。
「今、夢を見ていたんです」

静かな声だった。

弓子の病状がわかりにくかったのは、彼女の我慢強さと同時に、体に比べ、顔がげっそりと痩せ細らなかつたせいかもしれない。

「なんの夢ですか？」

「笹原と初めて会った時のこと……」

「初めて会った時ですか？ その話は聞いた事ないなあ。ヨリとは、相当、長い付き合いだと思っただけですね。弓子さんか

ら聞いた事ありませんたっけ？」

海老沢がそう応えると、弓子はうれしそうな顔をした。

「私、誰にも話したことありませんもの。あの人も誰にも話していないのかな…… それともあんなに小さかったから、忘れてしまったのかしら」

息が切れて、言葉はたどたどしくなったが、弓子は話すのをやめようとしなない。海老沢もじつと耳を傾けた。

真夏の暑い日、弓子は祖母に、ビニールプールを作っておくように頼まれた。小学生だった弓子が、庭でプールを膨らませ、水を張っておくと、祖母が小さな男の子を連れて、帰って来た。

弓子に男の子の名を教える間もなく、母屋で電話が鳴った。慌てて祖母が縁側から家へと戻って行く。電話で話しているのが聞こえてくる。受話器を置くと又すぐに次の電話が入った。そのうち来客までたて続いて、祖母は、いつまでも戻って来ない。庭にぼつねんと、弓子とプールと男の子が取り残された。面倒見の良い祖母が、小さな子を連れてくることはよくあった。弓子も、子どもの世話には慣れている。

けれど、その子はどうにもならなかった。

祖母の姿が見えなくなると、小さく丸まって、どんなに言葉をかけても、顔を上げようとしなかった。炎天下、ガラガラとした光と熱のもと、びくりとも動かない。塩をかけられたなめくじのように、溶けてしまうのではないかと心配になった。

プールの水を小さな片手桶に汲んでかけた。俯いた首筋は、垢でどすくろかった。肩にも腕にも背中にも傷があった。それでも子どもは無視し続ける。水に体がぶると反応するのに、決して視線を上げない。意固地な心。石礫いしつらを受け続けた仔犬のような、いじめ続けられた仔猫のような、執拗しつぱうな頑なさの中に埋もれている。

突然の衝動だった。弓子は思いっきりその手を掴んだ。

そのまま、プールへ突き飛ばした。今まで誰にもそんな乱暴な振る舞いをしたことはない。

(このままではこの子は死んでしまう)

切実に、そう思ったのだ。

子どもは、大きな声を上げた。わずか三十センチの水に溺れた。仰向けに倒れ、起き上がろうとものがき、水を飲んで、両腕を振り回す。弓子は、服のままプールに入った。突き出された、手を握った。両の手でしっかりと握り締めた。子どもを抱き上げて、顔の水を払った。眼が合った。怖い目だった。こんな小さいのに、見たこともないほど怖い目をしていた。膝に抱いた。きつく抱きしめて、そのまま、水の中に座り込んでいた。

「あらあらどうしたの？」

祖母が戻って来て、びしょぬれの二人に笑いかける。

「ごめんなさいね、長びいちゃって」

子どもをプールからあげようと手を出した。

男の子は、祖母の手に掴まらなかった。もつと強く弓子の手

を握り締めた。まるで、弓子の体に逃げ込むように。

「無理やり掴んだ手でした。あんなに頑なに拒んでいたのに、それを開かせて、握らせた。一度掴んだら、離してはいけないう手だったんです。もし離したら、あの子はもっと辛くなる、決して離してはいけないう手だったのに。」

父の会社が倒産して、私たちの都合であの子の手を放してしまった。あの子がそれからどんな目にあつたか」

その後、笹原由宜は、餓死寸前でアパートの押入れから発見された。海老沢と弓子は、搬送先で、救急車から降ろされた時の、ぼろ切れのような由宜の姿を見ている。二人の共通の記憶である。

「もう二度と私には、人の手を握る資格は無いと思いました。あの子は、私の手を握りかえたのに、それはあの子にとって命の綱だったのに。私は、答えることができなかった」

ただか小学生の女の子にどんな責任があるというのか。海老沢には、彼女を慰める多くの言葉も論理もあった。けれど、そんなものの方が、どれほどくだらないかもわかっていた。

「それが、ある日、大人になった彼がアパートの前に立っていました。びっくりしました。私はあの子を裏切ったのに、あの子はまるでプールで遊んだ次の日に、また今日も遊んで！ 弓子の目が、遠くを見つめる。」

「うれしかった。もう大人になってしまった彼に、私が何をしあげたらいいのかわからなかった。でも、もう一度手を握って、二度とその手を離さない、離してはいけないうと思った」言葉は途切れた。長い話だった。弓子は、眠ったように見えた。

海老沢が呼吸器を戻そうとすると、

「先生、私ずっと、よっちゃんに謝りたい事があつたんです」
(よっちゃん…… なつかしい呼び名)

海老沢がヨリと呼ぶように、弓子は笹原をずっと、よっちゃんと呼んでいたことを思い出した。

本多頼子はおもむろに110番通報した。

明彦は、月の光の中を、どこへとも知れず立ち去った。でも、友康の死体は、マンションの下の道路に打ちつけられている。

まずは、太郎と休場をここから逃さねばならなかった。この状況に巻き込まれている場合ではない。

二人を逃した後、通報した。深夜とはいえ、これだけ巨大な集合住宅なのだ。目撃者がいるかもしれない。そこからの通報で警察に踏み込まれるより、先手を打った方がいいだろう、と考えた。

電話では、見知らぬ男が突然部屋に入り込み、ベランダから飛び降りた、と話した。案の定、すでにどこから通報されて

いたようで、パトカーはすぐに到着した。頼子と雪那は、部屋で待った。

友康の遺体の周りには、ブルーシートが張られ、照明が点けられた。

私服・制服様々な人間が、部屋に入って来る。あらゆる痕跡を見逃すまいと調べ始めるその傍らで、事情徴収がなされた。

刑事たちは、頼子から話を聞く。が、雪那に話しかける者はいなかった。彼女が言葉をしゃべるとも思われなかったのかもしれない。その姿を見た瞬間「うっ」と声を発する者さえいた。

「彼女は私の患者なんです。今日は、彼女に付き添って外出したんですけど、途中具合が悪くなってしまつて。少し私の部屋で休んでから、病院に戻るつもりでした。それなのに、こんなことになるなんて…… 申し訳ありませんが、なるべく手短にお願ひします。彼女を早く病院に連れ戻りたいので」

「患者さんは、こちらでお送りしますが」

「それができないならいいんですけど、こうして、私が付いていなければ外出もできない状態なんです。ご理解下さい」

頼子は、最初に急いでいることをシンプルに伝えた。じつくり話を聞かれたら、辻褃の合う返事のできる自信はない。

刑事との会話には、

「知らない男。知らない。わからない」

ただ、ただ、それを繰り返した。刑事に疑いを差し挟む余地を与えないように、出来る限りキツパリと。

「それにしても、見ず知らずの人間の家に飛び込んで、飛び降り自殺するなんて変でしょう？」

鍵がかかかっていて屋上へは行けない、とか、緊急避難用の外階段のフェンスが高いとか、言い訳がましい、余計な事を言いたくなつたが、我慢した。犯人はいつも自分の言葉で墓穴を掘るものだ。

「飛び降り自殺なんですか？」

「あなたの証言では、そういうことになるでしょう」

「そうですか？」

「何か思い当たることはないですか」

「見当もつきません」

とにかく、知らぬ存ぜぬを通した。

刑事は、たまたま鍵を掛け忘れた玄関から入って来た男が、声をかける間もなく真つ直ぐ、開いていた窓まで通り抜け、ベランダから飛び降りたという証言以外、何も得るところはなかっただろう。

「通り抜けたと言つたつて、靴も履いていなかったんですか？ 遺体も履いていなかったし、ここに残ってもいない」

「そうなんですか？」

とりあえず、部屋の中の明彦の血のついた足跡は拭いた。下の地面の分までは無理だが。

刑事に、言葉尻を取られないように警戒するしかない。何しろ頼子自身は本当の事を知っているのだから。どこでぼろを出

すかわからない。いや、いざればろが出て、警察から何か言ってくるのは間違いないだろう。けれど、果たして事実を話したところだ

「で、本当は、どういうことなんですか？」

と、問い詰められるだろう。あの場にいた、自分たちにしかわからない姿をした、真実なのである。

「主人も担当の患者の容態がよくないようで、今日は戻れないと申しております。部屋はどのように使って頂いてもかまいません。どうしてこういうことになったのか、私も知りたい所ですが、とにかく、病院に戻りますので、何かありましたら、携帯に連絡下さい」

頼子は、話を切り上げようとした。

「もうひとつ、伺いたいのですが」

別の刑事が引き止めた。

「落ちた男は、一人だったんですか？ 目撃情報では……」

「彼女のような患者には、ルーティーンでない、非日常が一番身体に應えるんです。これ以上ここに興奮した状態でおいておくことは、大変危険なことなんです」

刑事の質問を無視して、頼子は話を切り上げて欲しいということを書き掛けた。

その返答に、二人の刑事はあらためて、まじまじと雪那を見た。彼らの良識が、彼女のような女性をそのような無遠慮さを持って見る事から押し止めていたのだが、一度見ると、人間と

は思われない弛んだ肉や爬虫類のような皮膚、傾いた体、どこが目や鼻で口かわからない造作に、目が離せなくなる。

そんな刑事の気が逸れたチャンスを狙って、

「でも『落ちた人が一人だったんですか？』って、どういうことでしょう？」

と、話を戻した。

「他にも、このマンションで亡くなった方でもいるんですか？ 心中だったとか？」

頼子は、わざと捜査をミスリードでできるような言葉を選んだ。五階から落ちて、立ち去った人間がいるという目撃情報が、見間違い以外ありえない、論外な証言であることを印象づけたかった。

雪那は心得たもので、そのタイミングで、倒れそうに頼子に縋すがった。刑事たちの思い込みに、上手くのった演技だ。

部屋を飛び降り自殺に使われたこの心療内科医は、被害者なのである。これ以上引き止めて、その患者に何かあったら、始末書ぐらいではすまない。刑事は、不承不承二人を解放した。

病院まで送るといふ申し出を断って、頼子は自分の車で海老沢病院に向かった。

錯乱した亜子を残してきているのだ。頼子には、海老沢病院に戻る必要があった。

車の中で、

「興奮した状態の患者って、私のこと？」

雪那がおっとりと言う。笑いを含んでいる。この騒ぎの中、いつもと変わらぬ落ちついた声音だった。

「ねえ、もし、宇宙人があなたのようなだったら」

頼子は、運転席で前を見つめながら話す。

「向こうから話しかけてくれなかったら、私たちにはわからないんでしょね」

「私のように？」

「ごめんなさい。変な言い方をして。あの刑事さんたちは、誰もあなたに話しかけなかった」

「そうね。一応、人型はしてるのにな。」

あなたの言うとおり、話しかける術も、意識のレベルも違えば、コミュニケーションは取り難い。もしかしたら、原子でできているか、ダークマターなのかより、人の目にどのような姿に映るかが、人にとっては大事なかもしれない。目鼻立ちのないもの、姿の無い知性とは、存在さえ確認しあえないのかもしれないわね」

終末の神

笹原由直は、拘置所にいた。

(閉じ込められる事に抵抗がないのは、三つ子の魂百まで、と

いうことが)

自嘲する。なすことのないまま、時の過ぎて行く感覚が懐かしい。子どもの頃は、空腹や寒さや暑さや暴力に対する恐怖、様々なものに脅かされていた。みずみずしかったからだろうか。老いて乾いた自分は鈍感になっている。

逮捕直後の留置所から、その日のうちに拘置所へ移すなど、手続きを踏みにじっている。取調べの必要なしということか。いや、むしろ日本の警察に取り調べて欲しくないのかもしれない。とにかく、自分の動きを封じ込めたい人間がいるのだろう。(そんなご丁寧なことをしなくても、今さら、何もできやしない)

いや、する気にもなれない。一体何と戦えというんだ。相手は正義の味方だ。悪の一味である自分は葬られるしかない。なるべく周りの人間に被害が及ばないよう、祈るばかりだ。

(あの時…… 海老沢とその母親の呼び止める声を振り切って走り出した時)

地獄のようなアパートから助け出されて、夢のような人間の暮らしを始めたのに、なぜ逃げ出したのか。自分がこの天国に住むべき者ではないと、思い知ったからだ。

(なぜ、自分にはここに住まう資格がないのだろうか)

ホームレスになって、ずっと考え続けた。

弓子との再会。透子が生まれた。やり直したかった。天国に住まう資格はなくても、少しでも人間らしく生きたかった。

だのに、透子は失われた。自分自身の愚かさど人間の浅はかさが、あの天使のような娘を打ち壊した。拭いようのない苦しみを与え、死の淵に突き落とした。今も思うだけで、身が震える。

それなのに、あれほどの愛しい存在を失ったのに、自分は葉子に縋って生き延びた。彼女の美しい指の指し示す方向を、共に見つめる事で生き延びた。

「私一人では、無理なのだから。あなたの助けが必要なのだから」

(いっしょに、生きよ！)

と彼女は命じた。

葉子の黒い眸がまっすぐに由宜を捉える。

「私には、見える目。あなたには、見えない目が与えられた。

何故なのだろうと思っていた」

「なぜ？」

(その答えが欲しい。生きる事を許されている意味が欲しい)

「選択のときが来るから」

葉子の声ですべての気を薙ぎ払う。

目が覚めた。

ガバツと起き上がる。

(夢か?)

違う。葉子の思念がある。三十歳のまま死んだ葉子。今ここので、まぎれなく彼女を感じる。

(これはなんだ?)

由宜は、まだ伽耶子の死を知らない。伽耶子の器が弾けて、人々の上に、降り注いでいるなにかを知らない。

由宜には、今の葉子とのやり取りで、彼女の中にある記憶が伝わってきた。京子を失って、壊れそうになっている明彦に触れた時、葉子を見た。人としての明彦ではない、何かの記憶が彼の中にあるのを。それは、葉子自身の記憶となつて残っていた。

(葉子の死の後も、生き続けてきた。ずっと長く生き続けて来た。だから、わかる。あの日の葉子には読み解けなかったもの。明彦に触れて葉子の見た幻の真実)

宇宙の始まりは、始まる前の宇宙があつたことを示している。時が、刹那であつても、永劫であつても。原子に、粒子に、有という事象に、終りがあるのではない。初めの存在が、終りという存在をつくる。時がベクトルをつくる。

明彦の中に見たのはそういうことだった。明彦という人の器に、なぜ終末の神が捕らわれてしまったのか。この宇宙をつくり、銀河をつくり、地球をつくり、生命をつくつた、創世の神が宇宙の彼方に走り抜けた後、彼に追いつきすべてを無に返すべき終末の神が、なぜここに留まっているのか。この地球の、人という微小な存在の中に捕えられているのか。

人間という枠の中では、到底、理解出来ないはずの何かを、今の笹原には理解できた。

「笹原さん」

拘留所の檻の向こうの暗がりから、知った声があった。廊下の灯の中に姿を見せたのは、開眼大悟だった。ペコリと軽く一礼する。

「なんでおまえがそっちにいるんだ。檻のこつち側にいるはずだろう」

笹原の一言に、

「いや、そんな場合じゃないから」

口の利き方は相変わらずだ。何をしゃべってもどこかコミカルになる。が、いつもの大悟らしからず、表情が強張っていた。

「マッテオから連絡がありました。明日、いやまもなく、例の消失の映像を自国内に配信して、国民投票するらしい」

笹原は生唾を飲んだ。

「そこから崩れたか……」

いかに笹原でも、この事態は予想出来なかった。

「俺は、俺のなすべきことをします。今の政府に、この事態に対応できる人間はいない」

大悟は、刑務官に鍵を開けさせた。

「そっちのことはそっちでやって下さい。釈放の書類上の手続きは江木がやります」

後ろにいた大悟の秘書が、軽く会釈する。

「あとは何かあったら、携帯に連絡下さい。それから……姉

さんの事よろしく願います」

大悟は来たときと同じ様に、ひとつペコリと頭を下げた。そして、背を向けると、もう大股に歩き出して行く。

笹原は檻を出た。大悟の秘書江木は、笹原に財布と携帯を渡し、

「車の手配をしますが……」

と申し出た。

「いや、書類の手続きだけですませたら、大悟の元に戻って下さい。こちらのことは自分でやります」

そう言いながら、笹原は携帯を始めていた。

土手下の暗い道路のガードレールに腰掛けて、ぼつりと車を待つ。結局こちら側の世界に引き戻されてしまった。

大悟の口から出た懐かしい名前、マッテオ。人の良い屈託のない笑顔が思い浮かぶ。何年会っていないだろう。

初めて会ったのは、葉子の仕事を手伝い始めてすぐ、二十年も前のことだ。

『友人の弟がトラブルを引き起こしたらしいの。助けてやって』と、葉子に頼まれた。

友人というのが雪那で、トラブルを起こした弟というのが、開眼大悟だった。

大悟は、迎賓館の裏庭にある噴水の中で、真夜中、晚餐会の招待国随行人と、酔って大騒ぎをやらかし、警備室に捕まって

いた。警備側は、迎賓館でそういう馬鹿げた騒ぎを起こす人間の現れる事を想定しておらず、取り扱いに困っていた。相手国へも配慮せねばならない。

笹原は、

『警備の不備が問題にならないうちに引き取りましょう』

と、高飛車に話を切り出した。

前例のない事を盾に、事件として扱えばいかに面倒なことになるかを強調した。そして、揉み消しは成功した。

連れ帰って話を聞くと、驚いた事に当事者二人は、初対面だった。

マッテオの国は、人口三万人程度のイタリア半島の極小国家で、年二回替わる二人の執政によって治められている。

「まるで、学級委員だな」

大悟の感想は、概ねの日本人の感想だろう。

大体、マッテオが随行員としてその日の晩餐会に出席していたのも、ちょうど日本にいる彼の国唯一の人間だったからだという。

大悟の方は、どうやって潜り込んだのか。ロシア貴族の末裔というのは本当らしく、天皇陛下を一目拝顔したいとばかりに、知り合いの知り合い、出来る限りの伝を頼ったらしい。そんな二人は、ともに二十代、おおいに飲み食い、盛り上がった。

男女であるなら、運命の再会とでも言うのだろうが、この酒癖の悪い二人である。間の悪いことに、とでも言った方がいい

だろう。宴の後の真夜中、再び、出会ってしまったのである。

どういう警備のもれからか、大悟は庭の茂みの中で酔い潰れたまま忘れ去られていた。マッテオは、喉の渇きから目をさまして窓際の水差しを取ろうとした。目を上げて、月明かりの外を見る。ちょうど、そのタイミングで大悟が、ふらふらと立ち上がったのである。随行員のベッドルームは裏庭に面している。都合のいいことに、そのまま外に出られるドアまでついていた。なんで、お互い手にウイスキーのボトルまで持っていたのかはわからないが、運命の再会を果たした二人は、そのまま飲み直して、じゃぼじゃぼと噴水に入り、大いに騒いだ。

確かに、その晩は暑かったし、月は満月だった。

この強烈な出会いを得て、二人が、その後二十年友情を暖めていたとしても、不思議ではない。

マッテオとの会話で、一番笹原の印象に残ったのは、

『まあ、国全体が顔見知り状態ですからね、公平な裁判なんか出来ないから、裁判官はみんな外国人なんですよ。執政だつて、議長みたいなもので、何から何までよく話し合つて決めるつてというのが、我国の自慢なところですね』

という説明だった。

が、まさか、こんなときにそれを思い出させられるとは。

マッテオと大悟の運命的な偶然は、時を経て、二人が各々の国の中枢にいることだろう。今まさにこの時、マッテオは二人の執政のうちの一人であった。当然、ユージン・ムーアによる

説得はこの国の執政たちにも行われている。マッテオは、消失の映像を入手し、それを国民全体に見せる事によって、判断を仰ごうとしている。

日本で考えるなら、国民をパニクに陥れる、としか思えない行為だが、彼の国の考え方は違うのだろう。これほどの未曾有の事態を国民に問うことなく、執政が判断することこそ、国民に対する裏切り行為ということになるのかもしれない。

それは、結構だ。どう考えようが、国の方針で構わない。しかし、今、世界は繋がっている。マッテオの国民への映像配信は、あつという間に世界を駆け巡るに違いない。

(そうしたら、何が起ころう?)

消失の事実を胸に抱え、それを押し隠しながら苦しんでいる人間は大勢いる。公表すべきだという思いに苛まれている者もいるだろう。ただ、事の重大さに決断しきれないだけだ。

すべてが明るみに出て、この微妙な緊張の糸が切れたら、世界はどういう姿を見せるのか。消失の規模の大きさに驚くだろう。我が身に降りかかる事を恐れるだろう。そして、その事態を避ける為に、どうすべきかを考える。

何が消失を引き起こすのか? その原因を追い求めている間に、消失という禍は、再び訪れるかもしれない。その観念に囚われたら、元凶が、破壊兵器であってもDNAであっても同じことだ。消される側にとって、原因が何であろうが、消されるという事実は変わらない。

世界中が、先制攻撃の刃をむく。

人の創り出した危機と神の終末。

その狭間にあつて、茫然と両者を見比べている自分の姿が、笹原には、はっきりと見えていた。

善良なマッテオの国から始まる、人の生み出す危機。

葉子の弟というこれほど身近な所に存在する、絶対的な終焉。

「一体、何がなすべきことなんだ」

笹原の頭上に広がるのは、月のない曇天だった。

もうひとつの真実

伽耶子というたんばく質の器が、生命という効力を失って機能を停止した。うちに閉じ込められていたものが、自分を取り戻した。果たして、それを伽耶子と呼び続けてよいものか。それは、わからない。ただ、空気が大地を蓋って、気象現象を作り出すように、記憶、想念あるいは人の気が、伽耶子という原子で作られていない何ものかの揺れによって、人々の脳、記憶あるいは心の波動に嵐を吹き荒れさせたのは、確かなようだった。

内海たすくは、夢を見た。一瞬の事だっと思ふ。眠っている暇などないはずだ。

そこには、叔母がいた。幼い頃別れたきりの人。女子大生だった。日傘の陰の微笑み、それしか覚えていない……のに。

彼女は、中年の女性になっていた。

舗装されていない細い路地裏。屈みこんで、手桶の水を鉢植えに撒いている。ちやぶちやぶと手先で水を弾く。白い米の伽汁。鉢から広がったししとう。

彼女がふと目を上げると、先に、男の子が立っていた。路地向こう。小学校に入るや入らずや。手招いても、寄って来ない。躊躇^{ためら}っている。駆け寄るには勇気がいるのだろう。ややあつて、やつと一步を踏み出すと、怖いものに追われるかのように、走り寄って来た。

叔母は、子どもを家に入れた。貧しい長屋住まいである。急いで戸を閉め、上り框に座らせた。手を濡らして、塩むすびを握り、男の子の小さな手に持たせる。子どもは無言でガツガツと頬張った。

もう、たすくにはわかっていた。叔母の頭の中のことが、全部自分の記憶になっている。この子は、一ヶ月前、母を亡くして、路地向こうの家に引き取られてきた。妾の子が本宅に引き取られたのである。子どもは小さくても、自分の存在が、本宅の女主人を鬼にしたことをわかっていた。自分をいじめるこの女主人の目には、自分こそが鬼に見えている事を知っていた。

だからといって、些細な事で怒り出し、泣き出す大人に、どう対処したらいいのかはわからない。子どもにとつて、学校は逃げ場だった。給食もあった。それが、夏休みに入ると、暑さと空腹は生きることさえ脅かした。他人が声をかけたり、物を食べさせたり、可愛がったりすれば、彼はもっと酷な目にあわせられる。

叔母は、男の子が食べ終わると、大急ぎで帰らせた。ひよこたんと走り去る子どもその後姿をいつまでも見つめている。

たすくには、その時の叔母が考えている事まで見えていた。叔母は、夫のことを考えていた。朝暗いうちから豆腐を作り、自転車を引いて売り歩いている夫。

無口な彼はあまり自分の事を話さない。それでも、長い年月を二人で過ごして来たのである。ぽつりぽつりと交わされた会話には、いくつもの風景がある。百合絵の中には、豆腐屋の子ども時代の記憶が詰まっている。

小学一年生の頃、風邪で数日学校を休んだ時があった。治ってから、朝、いつものランドセルで学校に向かうと、いつもとは違う恰好のはしゃいだ同級生たちがいた。その日は遠足だった。通学路の途中で彼は怖くなった。自分がとてつもなく恥ずかしい間違いを犯してしまったと思った。電信柱の陰に隠れながら、家に逃げ帰った。母親はいなかった。

その日の夕方、担任の女教師が家に来た。朝、逃げ帰った彼のことを同級生が伝えたらしい。

「みんなで揃んだおみやげです」

シロツメクサで作った冠を畳の上に置いた。

「ちやんと遠足の手紙も差し上げましたし……」

若くて正義感の強い彼女は、母親の正面に座ってそう言った。

朝から今まで、パチンコ屋にいた母親は、帰っていきなり女教師の訪問を受け、まったく状況を飲み込めなかった。

「そうですか、すみません。すみませんねえ」

とりあえず、習性となっている平身低頭の謝りを繰り返す。いつでも、何もかも、世間が正しく、彼女が間違っているのだから。

それでも、女教師は言い募った。

「まだ、六歳なんですよ。もう少し、親御さんにしっかりして頂かないと…… 育児放棄という言葉をご存じですか？ こちらのご家庭の様子をみています……」

「すみませんねえ。これからは気を付けますんで」

母親には、責め立てる女教師に帰ってもらう以外の望みはなかった。

幼い息子が、立ち上がって二人の間に割り込んだ。その小さな背に母を庇い、女教師に対峙する。

「ちがうよ、手紙なんか、僕が捨てちゃったんだよ」

年若い教師に向かって、そう叫んだ。

夫は、百合絵に言った。

「好きな先生だったのに、なんであんなこと言ったんだろうなあ」

百合絵は何も答えなかった。

百合絵には、彼女が出会う前の夫のために、してあげられることはなかった。ただ、今、夫の子どもの頃を思い出させられる小さな子どものために、何かをしてあげたかった。

目が覚めた。

「時間は……」

経っていない。

（今のは何だろう？）

現実……？ のはずがない。

（自分は二十歳までの叔母しか知らない）

なのに、夢と片づけることのできない記憶のリアリティ。

内海家の皆が愛した百合絵は、若い身空で十も年上の男に騙され、男の後を追って出て行った。

（可哀想な百合絵）

みんながそう言った。

大学教授、警察署長、大企業の重役、大仰な肩書きを持つ身内の中で、彼女は引き売りの豆腐屋といっしょになり、子どもさえ産むことなく、貧しいまま病で死んでいった。

誰もが、可哀想な人生であることを疑わなかった。

内海の頭を、辞めていった上司、同僚たちのことが過ぎった。

彼らもこんな風に、何かを見たのだろうか。自分たちが信じて疑わなかった事実の裏側。だとしたら、これは真実などではない。どんなリアリティーを持っていようと、やつらの都合のよいように人を動かすマインドコントロールだ。

(みんな、操られて自分の職務を放棄した)

内海はそう結論づけた。

だが、やつらの都合ってなんだ？ こんな事が何の意味を持つ。百合絵叔母がどんな生活を送っていたかなど、今の自分には何の影響も及ぼさない。

内海は自衛隊、あるいは民間の土木作業等を統括する都区役所の部署に緊急要請を出した。

『即刻、白居家の森の木を撤去し、すべて更地とせよ！』

そんな権限がどこにあるのか、考えるのもどうかしい。ユージン・ムーアの指し示した、白居家の森。この花里という地の潔白を証明せねばならない。どんな兵器もテロ集団も存在しないことを示す必要がある。三十六年前の消失を引き起こした元凶が、今この花里という地にあるなど、デマであると証明せねばならない。この地がテロリストの基地でないことを、世界に納得させられねば、核ミサイルが撃ち込まれる。

ユージン・ムーアの誤った信念が悲劇を引き起こす。

(誤った信念……)

本当にそうだろうか。自分が被弾する側にあるから、そう主

張しているに過ぎない。あの白居家には、なんら潔白を証明するものがない。

内海たすくの心を今の夢が過ぎる。

内海家の皆が憎んだ豆腐屋があそこにいる。初めて豆腐屋と会ったあの日、自分は豆腐屋を憎んでいた。百合絵叔母を不幸にした男と信じきっていた。

ユージン・ムーアは、今世界を救う事を信じきっている。この一瞬にも、世界の崩壊が始まるのではないかと、怖れている。真実はどこにあるのか。何が悲劇を生むのか。

(馬鹿馬鹿しい！ つまらないことを比べるな！)

内海は自分を叱咤した。

今、自分のなすべきことは、消失からであろうが、核からであろうが、この東京を守ることだ。

伽耶子の夜は、ここにもあった。

内海がそれを『夢を見た』あるいは『マインドコントロール』と考えたのと違って、塚田瑛佑は素直に、ころすけの心が会いに来たと受け止めた。

それは、白居葉子の屋敷に居候していた日々のせいかもしれない。その頃瑛佑は、昼間働き、夜大学に通う忙しい毎日、屋敷にいる時間は短かった。けれど、白居の森の不思議さを目の当たりにしている。世界が触れられるものだけで出来ていな

い事を学んだ。葉子の未来を見る目。伽耶子の人の心を読む力。そして、自分より二つ年下の明彦は、森に絡め捕られた蝶のようだった。彼の羽ばたきが空気を震わせる。微かな波動も、二人の女性の心を揺らす。

気の満ちた空間に身をおいて過ごしてきた。だから、今瑛佑の心に、こんなにもありありとところすけが思い起こされるのは、なにかの必然なのだと理解できた。そして、素直に身を任せた。

乾いた道端に、砂埃で白くなったぼろ切れのような子どもが落ちていた。戦時下の砂漠で、置き去りの死体は珍しくない。

でも、瑛佑が近付いた時、そのぼろ切れは、声を発した。

瑛佑は、両手を切り落とされた子どもを拾うことになった。

子どもは、瑛佑の手からしかものを食べなかつた。鳥の雛が初めてみたものを親鳥と決めてその後を追うように。

瑛佑は、すでに負おうには大きすぎるその子を布で体に巻きつけ、連れ歩いた。孤立した村に物資を運ぶときも、隠密裏に薬品等を陸揚げするときにも、同志を鼓舞する集会にも。

子どもは回復して、自分で歩くようになった。両手のないことにも慣れ、うまくバランスをとって、瑛佑と同じ速さで歩けるまでになった。両手がなくても、何でも出来た。

ただ、笑わなかつた。瑛佑がどんなに笑いかけても、笑わなかつた。

「そんな笑いたいような顔してるのに、なんで笑わないんだろ

うなあ」

瑛佑はよくそう言った。少年を『ころすけ』と呼んで、のびてきた髪が目にかかりそうになると頭の上でちょこんと結んだ。

「やっぱり似てるなあ」

そう言って、また笑った。

『ころすけ』は、まがの登場人物だという。

瑛佑と同じ日本人にはわかるようで、

「ころすけかあ？　ほんと、丸の集まったような顔してるな」と言つて笑った。

ある朝、瑛佑がいつものように髪を結んでやろうとして、手が首筋に触れると、少年が首をすくめた。口の端が少し上がっている。

「こちよこちよこちよ」

瑛佑がくすぐると少年のビククリ顔が、笑い崩れた。

「そうかそうか、なんだ実力行使が一番か」

瑛佑も笑い転げた。

笑えるようになった少年は、普通に生活できるようにみえた。

もう瑛佑が連れ歩かなくても、人の間で暮らしていった。

しばらくして、少年と同じ村の出身だという二十前後の若者が現れた。若者は、少年の本当の名を知っていた。そして、瑛佑が三日ほど村をあけて戻った朝、去って行くころすけを見た。ジープの荷台にその同郷の若者とともに乗っていた。

「ころすけ、どこに行くんだ。ころすけ！」

瑛佑は、大声で叫んだが、ころすけは振り返らなかった。

拾うてすぐに、ころすけのことは調べた。身内のものがいれば、返したいと願ったのだが、両親も姉もみな殺されていた。

出来る限りのことはしたつもりだったが、ころすけの心の痛みをわかるのは、同じ迫害を受けたものだけなのかもしれない。

諦めた。ただ、瑛佑の声に決して振り返らなかった、ころすけの背が忘れられなかった。

それきりだった。

P D F L の議長が暗殺され、犯人が両手のない男だと聞かされた。『サクヤ』を名乗ったと言う。ころすけだと思ふ。と笹原に言われた時、

「すみません」

と謝った。

(なぜ、謝ってしまったのだろう)

『サクヤ』と名乗ったことで、笹原に迷惑をかけるかもしれない、と思つたからか。

(でも、あいつが『サクヤ』と名乗る理由はどこにもない)

瑛佑とサクヤグループの繋がりがだつて、知つてはいなかっただろう。あの時は、まだ、ほんの子どもだった。

あの子どもが、そのまま兵士になつたのか。テロリストになつていったのか。

瑛佑の頭の中に、ころすけのその後が降つて来た。

同郷の若者が言つたのだ。

「おまえはどうして笑っているんだ」

と。

目の前で殺された父の、母の、兄の、姉の姿が蘇つた。自分で自分の顔を引き裂きたくなつた。だから、付いて行くしかなかった。

戦場での過酷な日常。銃を撃つ。人を殺す。体は疲弊し、心は鈍化する。同郷の若者とはずつといつしよだった。彼は本当に死ぬまで一度も笑わなかった。

若者の家は、村の長だった。軍がやつて来た時、家族を人質にとられて、父親は案内役をさせられた。村は軍によつて絶滅した。父親は裏切り者となつた。その夜、必死で生き延びた村人の一人が舞い戻つて来た。怨みの夜叉と化してあらわれたのは、近所のいつも遊んでくれたおにちゃんだった。彼は、父親を撃ち殺した。母が

「私も殺しなさい」

と言つた。が、銃を投げ出して、逃げ去つた。

母は、銃を拾い上げて、自分自身を撃ち抜いた。若者も、その銃を頭に当てて引鉄を引いた。けれど、弾は残つていなかった。

「誰を憎んだらいいのかわからない」

戦場で、若者はころすけにそう言つた。

彼は結局、直撃弾を受けて、ばらばらの肉塊となつた。誰を憎む必要もなくなつた。



ころすけもわからなかった。もう、何をどうしたらいいのかわからなかった。だから、組織の信念を信じるしかなかった。

PDFLの議長を殺して捕まった。裁判になった。言葉もわからない裁判だった。見知った顔が証言台に立った。『サクヤ』という語が発せられた。かろうじて、それが『エースケ』のことを言っているのだとわかった。証言台の男は、ころすけを指さして『奴は、サクヤのエースケのところにいる男だ』と言った。

「ちがう！」

ころすけは、叫んだ。

「エースケは違う！ エースケは違う！」

叫び続けた。なぜ、いまさら、こんな熱いものが自分のうちに湧いてくるのかわからなかった。エースケのくれた食事、寝床、ぬくもり……『笑えよ』

それは、一番遠い。夢よりも遠い。どんな願いよりも遠い。自分と少しでも関係づけられてはならない、聖域だった。

「ちがう！ エースケは自分とは違う」

床に抑えつけられても、叫び続けた。口輪をはめられても、叫び続けた。

裁判は初めから決まっていた判決を言い渡して終わった。

裁判所の裏には、護送車が待っていた。出発して、すぐに止まった。いや、止まらざるを得なかった。護送車は人に取り囲まれた。何百、何千の人々。暴動。口々に何かを叫んでいる。

車の中で、ころすけには、人々が何を言っているのか聞き取れなかった。まるで、地鳴りのように体にまで響いてくる怒号だった。非難なのか、共感なのか。解放を要求するのか、弾劾なのか。わからない。何もわからない。

向かいの席にいた警備兵が立ち上がって、運転席に繋がる小窓から、運転手に何かを怒鳴る。その瞬間、銃弾に撃ち抜かれた。地鳴りは波のように、車体を揺るがし、床も壁も天井もゆさゆさと揺れ始めた。人々の手が、護送車を押している。と、ころすけは感じた。ころすけの頭にたくさんの手のイメージが浮かんだ。

何に突き動かされている手だろう。その中には、殺した議長の家族の手もあるだろうか。自分の失ってしまった、子どものままの手も入っている気がした。

ついに、車体は倒れ、ころすけは下になった壁に叩きつけられた。次には、回転した天井に突き落とされ、煙が、目と咽喉を痛め、詰まらせた。

ころすけが最期に見たのは、小窓の向こう。粉々になって吹き飛んだフロントガラスの向こう。そこに広がる青い空。

『ころすけ、どこに行くんだ。ころすけ!』

瑛佑の声を背に受けながら、トラックの荷台で見たのと同じ青い空。

(エースケ、僕は何も言っていない。サクヤなんて知らない。エースケのこと、何も言っていない)

瑛佑の中で、映像は終わった。

現実の、湿気をおびた地下の壁が、目の前にある。

(馬鹿だなお前、それが言いたくて、来たのかよ)

瑛佑は、深いため息をついた。

せつかく、家族の中でただ一人生き残った小さな命だったのに。両親も兄姉も、生き抜いてくれることを望んだであろうに。

ころすけは十数年たって、こんな風に死んだ。瑛佑には、このことをどう受け止めたらいいのか、わからなかった。今までも、ずっとこんなことばかり見続けてきた気がする。

携帯が鳴った。

「わかりました。そのまま、そこにいて下さい。迎えを送りますから」

そう返事した。

ころすけは、どこにもいる。自分は生き抜いて大人になったのだから。瑛佑は携帯を握りしめたまま、目の前を凝視する。

(大人として生きる)

夜 明 け 前

休場は、太郎を連れて海老沢病院に戻った。太郎は、ベッド

に横たえられた伽耶子の傍らで、いつまでも泣いていた。それは、十二歳の男の子が、突然の母の死に涙する普通の場面に見えた。ただ、その背景に、なんと人と違う世界を抱えているところか。

笹原は『伽耶子が太郎を守るだろう』と言ったが、その伽耶子はもういない。彼女は、この災厄を避ける術を本当に持たなかったのだろうか。

笹原は『友康が明彦を守るだろう』とも言ったが、その友康ももういない。彼はこれから自殺者として、冷たい台の上に運ばれ、解剖されるに違いない。

一晚のうちに、二人とも逝ってしまった。

休場は、太郎をどうするか迷った。果たして、白居家に戻しているものだろうか。相談する相手は、やはり海老沢しか思いつかなくった。友康のことも伝えねばならない。

それにしても

(伽耶子さんの遺体にも付き添わないで、どこにいるんだ)

病院内を歩き回る。

深夜の廊下で、立ち話をしている海老沢を見つけた。話の相手は石渡多枝だった。近付くと、二人は話を止めて、休場を見た。海老沢の目は、赤く充血していた。

「弓子さんが息を引き取った」

「えっ?」

あまりに唐突だ。

海老沢は、そのまま廊下のベンチに座り込んだ。代わって、多枝が今までの経緯を説明してくれた。弓子の病気については、初めて耳にすることばかりだった。

休場には、なんの言葉もみつからない。

「なぜ、今なんだ」

絞り出すような海老沢の声が、静まり返った廊下にともる。頭を抱えたまま、うずくまっている。

弓子の容態が急変してから、笹原に連絡をとろうとしたらしいが、どうにもつかまらなかった。携帯も通じない。その直後の逮捕だ。

(昨日の晩、雪那と自分の前から、患者の容態が急変したと立ち去ったのは、弓子さんのことだったのか)

その後のあの事件。巻き込まれた亜子は、正気を失っている。看取る者は、誰もいなかったであろう。

休場は重いため息をついた。これ以上暗い話を伝えたくはなかったが、昨晩の友康の死を伝えないわけにもいかない。どうにか話し終えたその時、多枝の携帯が鳴った。

(えっ?)

多枝の表情が、表示された名前に驚いた。

「はい、はい、わかりました」

返事をしただけで、携帯を切った。

「社長からでした」

多枝は相変わらずの呼び方である。

「拘置所じゃないのか？」

休場と海老沢は、同時に声をあげた。

「出られたから、すぐ迎えに来てくれて」

多枝は、そう言ってから、一呼吸おいて、

「奥様のこと、とても電話じゃ、話せなかった。会ってから、お伝えします。伽耶子さんと樋山友康さんのことも」

と、言った。

休場が

「俺の車で」

と、申し出たが、

「今日は、私も車で来ているから大丈夫。すぐにここへ連れて来るから」

多枝は、小走りに去って行った。

休場はその後、海老沢と相談の末、太郎を瑛佑に預ける事にした。

友康の家での銃撃。それは、あまりに違う世界の出来事である。日常というもののレベルが違う。自分たちでは、何が起きているのかもわからないうちに、撃ち殺されてしまうだろう。

瑛佑なら、対処できるかもしれない。

連絡を取ると、ほとんど待つこともなく、コウタという異国の少年が迎えに現れた。

伽耶子の遺体が検死に運ばれて行く。太郎が『うちで伽耶子

の帰りを待つ』と言い出した。それは説き伏せたが、『タズさんもいっしょに』というのまで、だめだとは言えなかった。コウタという少年には、白居家に立ち寄ってから、太郎とタズさんを瑛佑のもとに送り届けてくれるように頼んだ。

多枝は、車を運転していた。

夜明け前、最も濃い闇の中、土手沿いの道の街灯の下に、ぼつりと笹原由宜は立っていた。携帯電話で誰かと話している。多枝が近寄って車を止めると、ゆつくりと顔をこちらへ向け、

「やあ」

と、手を上げた。

オフイスで会う時と変わらない顔をしている。

（私はそんなにも外側の人間なのだ）

と、思ってしまう。

「悪いな、もう秘書でもないのに」

（私は、秘書でもないのに、社長に頼ってもらえる人間になりたかった）

そう言いたかったけれど、今はもつと伝えねばならないことがある。ここまで運転しながら、どう話すか、何度もシミュレーションした。後部座席に笹原が座るのを待つて、

「伽耶子さんが」

多枝が話し始めるのを、笹原が遮った。

「君を待つ間に情報収集したよ。逮捕されて、わずか一日なの

に……」

笹原は、深いため息と共に一度言葉を切ったが、あとを早口に続けた。

「白居伽耶子が高野洋二に殺され、樋山友康が都内マンション五階から飛び降りた」

多枝は、伽耶子を殺した犯人の名前までは知らなかったし、友康が飛び降りたのが五階である事も知らなかった。笹原には、携帯一台あれば、十分なのであろう。

「とにかく、これからも大変な事態は続く。朝には、日本中、いや世界中がパニックに陥る。いろいろ動いて欲しいんだ。まずは、白居家周辺の行政の人間と瑛佑を会わせたい。一人住まいの高齢者とか、一人親世帯とか、助けの必要な人間の情報を収集したい。弓子がいればいいんだが、とりあえずは電話でもいいから、弓子に仲立ちしてもらって」

「社長！」

今度は多枝が話を遮った。

「奥様は、先程海老沢病院で息を引き取られました。膵臓癌でした」

やっと、絞り出した言葉だった。

「えっ？」

笹原の上に現れたのは、聞きそなった言葉を聞き返す人の表情だった。

「奥様が、弓子さんが亡くなりました」

「どうして？」

「膵臓癌だったと」

「そんなはずない」

「海老沢先生が」

「亜子を連れて福島に行ってる」

多枝の言葉をどうしても受け止めようとしなない。言い募らなければならなくなる。

「弓子さんは亡くなりました」

「そんなこと、ありえない」

伽耶子の突然の死。友康の突然の死。その情報を受け止めることはできなかったのに。

「これから、海老沢病院に向かいます。弓子さんが待ってます」

「弓子は待ってるのか？」

本当に笹原が混乱しているのがわかった。

「弓子さんはお亡くなりました。海老沢病院で」

「待っているのか？」

それは、言葉の綾だ。生きて待っているのではない。海老沢病院の一室に冷たい遺体となって横たわっている。

言葉が通じない。多枝とて、こんなことで押し問答したくはない。運転席から笹原を振り返り、真っ直ぐその目を見つめて繰り返した。

「弓子さんは先程、海老沢病院で膵臓癌のため、お亡くなりました。私はこれから社長をこの車で海老沢病院までお連

れします」

笹原の目は宙を泳いでいた。今まで、ただの一度もこんな笹原を見た事はない。命の危機にさらされるような場面できさえも。

「社長！」

笹原は、のろのろと後部シートをドアの方へと移動して行く。多枝は、運転席から降りて、後ろへ回った。笹原は車を降りようとしている。

「車に戻って下さい」

笹原は多枝の顔を見て首を横に振った。子どもがいやいやをするようだった。何を意味しているのかわからない、何を言いたいのかわからない。多枝の手が笹原の腕を掴むと、彼は反対の手で彼女を押し退けた。

「一人にしてくれ」

笹原の手は震えていた。

「そんなことできません」

「少しの間でいいから。少しの間でいいから」

そう懇願しながら、笹原はのろのろと歩き出す。

その朝初めての光が、土手の上に射した。しかし、彼方の黎明は笹原には届かず、土手に沿った闇の中を、彼は茫然と去って行った。

朝

朝が来た。陽の光が差し込む。部屋の高い位置についた小窓だけが、朝を伝える。

タズは、そっと布団を抜け出した。身支度を整え、鞆に荷物を詰めた。小さな部屋である。視線を男に走らせまいと努めて、静かに息を詰めて、用意をした。明彦は眠っている。振り返りたくなる気持ちを宥めた。

裏戸を出る。早朝の空気。

(昔……言われた)

富子の言葉が、突然思い出された。彼女は、十も年下のタズに、意味ありげな口角を吊り上げた笑みを見せて言った。

「タズちゃんにもいつかそんな目が来るわ」

SEXの後では、男女はそれまでとは、全然違う関係になるのだと富子は言った。

「タズちゃんもいつかわかるわ」

富子は繰り返して言った。

それは、本当だ。でも、あまりに分が悪い。タズは手を見た。萎びた、節くれだった、染みだらけの手。手だけではない。自分分は老婆なのだ。顔にも体にも皺だらけの染みだらけの皮が張り付いている。

明彦と一夜を共にする。それは怪奇映画のおどろおどろしさだ。中国の獵奇譚。若い男が宿屋に泊まると、夜中行灯の灯り

に、包丁を研ぐ老婆が映る。若い男を殺して血を吸う妖怪。まさに、今の自分はそれである。こんな事を仕出かすなど、もう生きていることさえ、恥ずかしい。目覚めた時、布団の中に、何もつけない下半身があった。たよらない裸身。下穿きを脱ぐなど、便所と風呂以外では経験したことがない。怖くて、明彦を見ることができなかった。布団の中には、触れていなくても、ぬくもりがあった。自分のおどろおどろしさも、伝わってしまうのではないかと恐ろしくなった。

「タズさん」

太郎の声。

視線を返すと、太郎が立っていた。コウタもいっしょにいる。

「タズさん」

太郎が駆け寄って来る。

「伽耶子さんが……」

伝えなくてはならない。太郎の母は、死んでしまった。

「今、病院で会って来た」

太郎は言った。タズは、太郎の顔をじっと見た。涙で腫れた

目をしている。それでも、気丈に耐えている。

「伽耶子さんの最期のこと」

「海老沢先生に聞いた。一度も目を覚まさなかつたって」

「ええ」

「僕は、明彦さんを迎えに行ったんだ。でも、明彦さんは姿を

消してしまった。それから、友康さんが事故で亡くなりました」

（知っている）とは言えなかった。

「みんなが明彦さんを探してる」

ましてや、

（今、自分の部屋で眠っている）などとは言えなかった。

口が裂けても言えない。明彦は太郎の父である。

そのことを思ったら……。

昨夜の事を知られたら……。

（死んだほうがましだ！）

「どこかへ出かける所だったの？」

太郎が問う。視線が、タズの鞆を捉えている。

「いいえ、お届け物があつたんで、いろいろ。でも、後でいいんです」

うやむやな返事になる。

「海老沢先生や休場さんが、僕にしばらく瑛佑さんのところへ行っていないさいって」

「ああ、それで……」

タズの視線が、コウタを捉える。

（瑛佑さんの所から迎えに来たのね）

「タズさんもいっしょに来て」

太郎は、タズの手を取った。

「いえ、わたしは」

手を押し返してタズは首を振った。この手は、罪人の手であ

る。太郎を穢しそうな気がした。

「危険なことがあるかもしれない」

太郎は、言い張った。昨夜の銃を持った人間たちとの遭遇が頭に浮かぶ。

「わかりました。でも、おうちのこともありますから、このままというわけには。着替えも揃えてから、必ず後から参りますんで」

タズの言葉に太郎は、

「伽耶子が死んで、もう僕の家族はタズさんだけなんだよ」

『家族』という言葉で、投げ付けられてタズは混乱した。自分も太郎の家族ではない。白居家の使用人である。

なおも言い募ろうとする太郎をのけて、

「太郎ぼっちゃんを先に連れて行って下さい。私は大丈夫です。後から行きますから。海老沢先生にでも、休場さんにでも伺ってちゃんと後から行きますから」

コウタに向かつて言った。

「わかりました」

コウタは、太郎の手を握って、歩き出した。

コウタに引つ張られながら、それでも振り返りながら、消え入りそうな声で太郎は繰り返す。

「僕の家族はタズさんだけなんだから、必ず来て。どこにも行かないで」

すでに、タズより背が高い。歩く一歩も大きい。それでも、

まだ子どもなのだ。葉子が産んで、伽耶子の育てた、大事な、愛おしい、白居家の子。それが、

(家族と言ってくれる)

目頭が熱い。

「連れて行きますす！」

と、コウタは声をかけ、太郎と共に、森の中へ走り出した。

「お願いします」

タズは、その背に頭を下げた。

突然、車の音が響いてきた。門の外に出てみると、坂道を延々、何十台もの様々な形の重機車両が上つて来る。

「待って下さい、何なんですか？」

タズは、先頭車両の運転席の男に止まるようにと手を振った。しかし、車はタズの制止をまったく無視して突き進む。そして、なんのためらいもなく、白居家の塀を打ち壊した。そのまま門を使わず、効率良く森へと踏み込んで行く。学者たちがどれほど嘆くかわからない希少植物を、容赦なく踏み散らしながら。

タズは、家屋へ踵を返した。明彦の眠る白居家。

(もう、いい)

何がいいのかもわからない。

「どうなっても仕方ない」

と、繰り返し呟いていた。

太郎はコウタの後に続いた。当然、森の裏木戸から抜け出ると思っていたのに、コウタは海老沢病院に入って行った。

朝の病院は、昨日の白居家の事件の衝撃は衝撃のままに、入院患者に朝食を作るおばちゃんたち、回診の準備をする看護師、受付や売店を開けようとする職員、それぞれいつものように動いていた。

騒ぎは、食堂のテレビから伝わってきた。誰もいない食堂にほうっておきっぱなしにつけられている毎朝のテレビ。その前に、一人二人と人が集まり始める。

「大変だよ」

と、囁くように呟かれていた言葉が、人が増えるにつれ、大きなよめきが変わっていく。廊下を通る人間を、大声で呼び止める者もいた。調理室もナースステーションも空になった。

わざわざ病室まで、患者仲間を呼びに行く者まで現れた。生真面目な看護師長が、

「あなたたち、何をやっているの。仕事に戻りなさい」

と、声を荒げて入ってきたが、すぐに彼女自身もテレビに目を奪われた。覗き込んだ者は誰だって、釘づけになる。

ニュースは、次の番組に変わる事なく、ずっと続いた。繰り返シイタリア半島の小国から流れ出た衝撃の映像を映す。世界の反応を映す。核ミサイルを映す。暴動を映す。

日本とIT産業の提携で深く結びついた親日派のその小国は、日本に核ミサイルを向けている国々を非難した。すると同時に、

ネットで繋がった砂漠の国々で、難民たちが集会を開き、暴動にまで発展していった。

太郎が食堂の前で立ち止まったのは、テレビ中継から漏れ聞こえる声のせいだった。テレビの中の街にあふれかえった異国の人々は口々に叫んでいる。その言葉は、太郎が白居家で何度も耳にしたあの歌の歌詞に似ていた。

『ナサート、ナサート、ゼイ、セイ、イツツ、イン、トキオ』

拳を振り上げ、大声をあげる人々も

「ナサート、ナサート、トキオ、トキオ」

と叫んでいる。

人だかりの後ろから、太郎は伸び上がってテレビ画面を見た。画面下の白いテロップには漢字で「花里」と出ていた。

『花里を守れ！ 神の国、花里』

(ああ、そうだったんだ)

太郎は、伽耶子を失う不安に苛まれながら聞いたあの歌が、この花里を歌っていたことを知った。伽耶子を失った今、初めてそれを知った。

茫然と立ち尽くす太郎の手をコウタが掴む。強く掴んだまま、病院の階段を地下に降りて行く。『あの部屋』に向かつて。

コウタは慣れた足取りで進んで行くが、それに従う太郎は昨日の続きの世界に紛れ込んだような気がした。非常灯しか点いていない地下への狭い階段を降りて、使われていない物置のよな部屋に入った。病院の行き止まりに辿り着いたのに、そこ

から別世界が広がっていた。隠し扉から続く通路。まるで秘密基地だ。

驚いて言葉もない太郎に気付いたコウタは、

「銀の舟へようこそ」

と、言って笑みをみせた。

「ちつとも舟じゃないけどね、なんでそんなネーミングなんだかはエースケに聞いてよ」

戻って来た多枝に、笹原が姿を消したと聞いた時、海老沢は（なぜ、いつしよに迎えに行かなかったのか）と深く後悔した。

「ごめんささい」

うな垂れる多枝を

「君のせいじゃない」

と、海老沢は慰めたが、多枝は首を振りながら、座り込んだ。

「私のせいだとかせいじゃないとか。違うんです。私自身がイヤなんです。なんていやな人間なんだろう」

「……」

なんのことなのか、海老沢にも休場にも言葉のかけようがなかった。

「笹原社長を尊敬しています。私はずっと、もっと奥様に社長を理解してあげて欲しかった。すごく大変な事をたくさん抱えていたから、もっと力になってあげて欲しかった」

「わかるような気がするけど」

休場が余計な口を挟んだ。

「葉子さんが亡くなっても、社長は普通にしてた。きつと大変だったと思うけど、普通にしてた。強い人だからだと思いましたが。どれほどのものを抱えても切り抜ける、強い人です」

多枝は、涙を拭った。

「弓子さんの死は、耐えきれないほどのものなんでしょうか」

二人には答えようもない。

「私は、弓子さんを見くびっていたんです。だから、社長がそんなに動揺したことがショックなんです。私はいつもそう。この年になっても、生意気だった学生の頃と変わっていない」

海老沢が大仰な溜息をついた。

「人間、それだけわかっていけば、たいしたもんだよ。」

それから、君の間違いは、ヨリを買い被っている事だ。あいつは強い人間なんかじゃない。本当に強い人間てのは、喜び方も怒り方も泣き方も知っている。あいつときたらなんにもできやしない。

それじゃあ、ヨリの居場所がわかったら教えてくれ。しばらく弓子さんの傍についてやりたいんだ。ヨリは行方不明、亜子ちゃんがあれば、静かに見送る人間が必要だろう」

海老沢は、飄々と去って行った。

多枝と休場は、その白衣の後ろ姿を見送った。

「なんか……」

休場が言いかけたが

「なんで笑うのよ」

剣呑な多枝の物言いに遮られた。笹原が辞職した時に続き、二度も涙を見られたことだけでも傷つく。

「笑ってなんかないよ」

「うそ」

「いや、嬉しいような気はしてるけど」

「何が嬉しいのよ」

「完全無欠の石渡さんが、そんな事言うなんて」

「最低！」

本当に怒っている。

「ちよつと待って」

休場は、慌てて手帳を出した。慌ただしくページをめくり始める。

「笹原さんにもいろいろ取材してるからね、確か君の事も……」

笹原が自分の事を何と言ったのか、多枝が興味の無いはずもない。この話題は彼女の怒りを収めるいい手であろう。

休場はメモを読み始めた。

「彼女は、素直過ぎて困ることがある。本当にたまにだけけど、弱音を口にする。瑛佑も多枝ちゃんも、ものすごい能力者なのに、突然そんな事を言い出すから驚くんだった」

休場のメモは、笹原の言葉をそのままに写していた。

「ほら、なんか今の状況っぽくて面白いだろう」

「それで」

休場のコメントなんかいらぬ、という多枝の表情である。

「彼女も瑛佑と同じで、なんか生徒みたいな顔して、こつちの話聞くんだ。瑛佑は物凄いカリスマで人を虜にする。救世主とまで崇めてる人間もいる。なのに、全然そんな感じじゃないし。」

多枝ちゃんは、全くその逆。人間らしくなくて、魅惑的なんだ。機械のように仕事をこなす。客観的で、フローチャートで言うなら、判断のIFのひし形がどんなにピシシリ並んでいても、最大限の数値データを解析しながら、全く処理スピードを落とすことなく左右に振り分けていく。ファンタスティックな能力だ！」

休場は、ちらりと多枝を見た。

「ありがとう。単純だけど、元気がわいたわ」

そして、少し躊躇った後、

「恥ずかしいけど、聞いていい？」

と、言葉を続けた。

「何？」

「弓子さんのことは？」

「彼女のことは何も聞いてない」

「そう」

「いや、ひとつある。笹原さんの言葉じゃないけど」

「何？」

「葉子さんが、笹原さんに、弓子さんは植物のような人だと言つたらしい」

「植物のような人？」

多枝は繰り返した。漠然とわかるような気もする。

「振り返らないでいると気付かないうちに枯れてしまう、と」
多枝はごくりと唾を飲んだ。葉子の予知なのだろうか？ それとも警告だったのだろうか？ 確かに、弓子は笹原の知らぬところで死んだ。そのことを、笹原はどう感じているのだろうか。

『これ以上、奴を追いつめないでくれ』

休場の頭には、海老沢の言葉が浮かんでいた。

タズは屋敷に戻った。女中部屋の戸にかけた手は震えた。長年住み慣れた自分の部屋の戸を開けるのに、目眩をおこしそうな動悸がした。ものの十分前に出たばかりなのに、布団の上に取り上がった明彦の姿を想像すると、顔から火が吹き出るようだった。

俯きながら部屋に入った。明彦は起きていなかった。部屋は出て行った時と何も変わっていない。

「明彦さん」

返事はない。近付いて眠る明彦の顔を見た。息が荒い。苦しげな呼吸と汗が、ただの眠りでないことを教える。触れてみた。

(熱い)

尋常ではない熱さだった。

「明彦さん」

声をかけても、臉は開かれない。

外に大きな音がした。ベリベリと物を引き剥がす音。ズンと何かを打ち砕く音。タズの不安が煽られる。

はるか昔、狂女が犯され葉子を身籠ったとき、この白居家の広間にたくさんの人間たちが集まった。その光景がフラッシュバックする。物言わぬ人々の集まり。今、タズは一人でありながら、多くの意識とともにいた。それらに、タズは繰り返す。

「もうどうなっても仕方ない。もうどうなっても仕方ない。もうどうなっても仕方ない。もう……」

昨夜頼子は、雪那と共に海老沢病院に帰り着くと、すぐ亜子の病室へと戻った。看護師が一人ついていた。亜子は、ベッドに縛り付けられている。入って来た頼子の視線がその紐に注がれると、

「先生、すみません。でも、暴れてどうにもならなくて。鎮静剤で抑えてもすぐに目を覚まして、頭を壁に打ちつけたり……」
年若い看護師は、ベソを掻きそうほど動揺している。亜子の頭に巻かれた包帯や、看護師自身もあちこち引っ掻かれたらしい傷痕が、縛り付けることになった経緯を示していた。

頼子は紐を解いて、亜子を強く抱きしめた。ぶつぶつと呟き、時に奇声を発し、暴れ出そうとする亜子の体を、一晚中抱きし

め続けた。そうして長い夜が過ぎ、やっと亜子も頼子の腕の中で寝息をたて始めたのだが。

それも束の間、夜が明けて重機車両が森に踏み込むと、亜子がかつと目を見開いた。外の大音量の破壊に、頼子が窓を開けて見ると、大木が大きく傾いで倒れようとしていた。

情け容赦なく木は薙ぎ倒される。生木の木肌が無残に引き剥がされる。樹液が零れ落ち、地に吸い込まれていく。昨日、伽耶子の血が飲み干されたように。

「キィ〜あ〜キィ〜」

亜子が金切り声をあげた。猛禽の爪に掴まれた野鳥の断末魔のようだ。

看護師が両手で耳を塞ぐ。海老沢病院の廊下に、金属を引っ掻くような甲高い音コトになって響き渡る。亜子の叫びは、シヨベルカーの殺戮に呼応して、音量を増し耳をつんざく音になる。

亜子の体は硬直して、爪を頼子の皮膚に食いこませた。眼球が飛び出しそうに見開かれている。

錯乱した娘は、義母の死も知らぬまま。

見開かれた目は何を見る。

女のか細い首に斧が振り下ろされる。

首は落ち、桜の精がそれを抱く。

谷たにの娘は、夢幻の世界でそれを目撃する。

繰り返し目撃する。

頼子は、窓を閉め、カーテンを閉めた。亜子の頭をしつかりと抱きかかえる。

「あなたのせいじゃない、あなたのせいじゃないのよ。もつと、早くにわかってあげていたら」

笹原を探すことを多枝に任せ、休場はもう一つの気がかりをはつきりさせようと、雪那を探していた。こんなにも次々と降りかかる事件に翻弄ひんろうされながら、それでもチリチリと脳の片隅が焦げている。

「彼岸の眠り」

そう言い置いて、伽耶子が去ったあの時。その伽耶子を追いかけようとしていた休場の視界に一瞬、雪那の姿が入った。彼女は、何かを訝いぶかしむような様子で立っていた。

「それなら、あの消滅は？ 亜子ちゃんのお母さんと朴の木を消したのは誰？ 誰が明彦さんの力を使ったの？」

走り始めた休場の耳に、雪那の呟つぶやきが届いた。考えねばならないことが多すぎる。今、目の前の危機を回避する為、脳の血流がほとばしっている。でも、流れの底に、いつもその言葉を見ていた。

「誰が明彦さんの力を使ったの？」

雪那の疑問符。

伽耶子は言った。

「母も、父も、姉も、あの木が兄の力を使って殺した。太郎のことも殺そうとした」

太郎から聞いた友康の言葉も同じだった。

「明彦君の力が明彦君によって使われたわけではないんだ。葉子さんが一番恐れていたのは、明彦君のそばで、強い憎悪の育つこと」

誰の憎悪が明彦の力を使ったのか？ 朴の木が消えたあの日のあの場にいたのは、笹原と海老沢である。

『これ以上、奴を追いつめないでくれ』

海老沢は、何度もそう繰り返した。それは、この事を感じたからなのか？

雪那は、明彦の力を使ったのを誰だと思っているのか、聞かずにはいられない。

携帯で連絡をとった。雪那に指定された海老沢病院の裏庭に行くと、彼女は一人、いつもの人とも見えぬ不思議なシルエツトで立っていた。

休場の顔を見るなり、雪那は話し始めた。

「大悟から連絡があったわ。消失の映像が世界に配信された。

その元凶のテロ集団が、白居家に巣食っていると報道されるだろうって」

「そんな！」

「核ミサイルやら、空爆が始まるかもしれないって」

「短絡的過ぎる」

休場の中にはどこかに、そんなことになるはずがないという、この現実を認める事の出来ないものがある。

「戦争の始まりって、どんなものだったのかしら？」

突然、雪那の声は、緊急事態を知らせているとは思えないトーンに変わった。

「今までに人の世に起きた戦争の始まり」

「ちょっと待ってくれ、今は戦争の始まり談議をしてる場合じゃない。大悟はそれでどうするって！」

「伽耶子さんが亡くなったとき、みんなにもいろいろなものが見えたのよねえ」

休場は、友康の祖母の姿が見えた事を思い出した。

（自分も見た。確かに見えたのはその通りだが、なんで今そんな事を持ち出すんだ！）

「私には、伽耶子さんそのものが見えたの」

「そのもの？」

「人間でもたんばく質でも原子でもない、時の上にさえない。始まりの向こうにいた。」

何一つ始まるはずもなかった世界で、時が刻まれた。

スルリと抜けた不均衡が追いつく間もなく離れて行つた。

それでもたやすく追いつくはずだった。

なのに、地球という畏があった。

たった一つのまれなるベクトルの後を追うと、数えきれない

ほどにちりばめられた時のベクトルがあった。

すべてが時を持つ世界。始まりと終わりのある世界。そこで彼女は地球に落ちた。

時に囚われた永劫のように、

空間に囚われた素粒子のように、

瓶に囚われた空気のように、

赤ん坊の中に固定化された。

入出力装置を持たない赤ん坊のたんばく質に」

「伽耶子さん？ それとも明彦さんのこと？」

「どちらも。」

地球に魅せられた半身と畏から逃れようとした半身。

二つに分かれて双子として生まれた。

地球の畏は、たんばく質たちは、空から落ちてきたものが、入出力のない赤ん坊に囚われる事を知っていた。

器のままに閉じ込め続ける事を使命としていた」

「全然わからない。話が見えてこない。伽耶子さんと明彦さんは双子じゃない」

「鉄で人を殺したように、

核で戦いに勝ったように、

何者かが彼を使った。

使うことが出来た。

何がスイッチなのか。

何が彼を発動させるのか。

そんなことはわからない。

でも、あの桜の木は人の心臓を止めた。

そして、誰かが、消した。

消しゴムを使うように。

人を消した。

木を消した。

世界を消した」

「雪那さん、雪那さん！」

休場は、雪那の肩を掴んで揺すった。彼女の心はここにはない。

その体が言葉を紡ぎ出す装置になる。口を動かしてはいても、それは……。

「今が緊急事態なのはわかるだろう！ お互い生き残れたらゆ

っくり話を聞くから、とにかく今は俺のわかる範囲でしゃべってくれ！」

「はい」

まだ夢見ているような返事だったが、

「亜子ちゃんの母親と朴の木を消したのは、誰なんだ？」

休場の質問に、雪那はゆっくりと答えた。

終末への誘惑

その日の朝は、始まった。

人がその日をどのように過ごしたか、正確に書きとめる事はむずかしい。イタリア半島の小国から発信された映像。瞬間にすべてが消えた映像。その消失を起こした兵器が日本の東京、花里という地にあるとの情報。世界が固唾を呑んだ。

信じる者、信じない者。情報はインターネットで世界を駆け巡り、議論は膨れ上がって行く。町が、人々が消されたのは、ただかだか三十七年前の話である。個々に留められていた記憶、分断されていた痕跡が、ネットに吐き出され、その総量が質を変えた。消失は疑いようのない事実となっていた。

事実と決まれば検証がなされる。世界中のジャーナリストが躍起になって真相を追い求めた。ノーベル賞委員会やインターネット・ジェンスコミュニティの存在が浮かび上がってくる。

そもそも、初めの映像配信は、イタリアの小国が花里に向けられた各国の先制攻撃の準備を、国民に公表して賛否を問うものだったはずだ。

その小国は、世界で最も早く共和国となった国である。歴史的にも他国に占領されることがなかった。資源のない貧しさもあるが、良心を持った国として近隣諸国の尊敬を集めていた故でもある。戦争難民を自国の不利益も顧みず、強国の圧力にも屈せず受け入れる国だった。観光とIT機器を生業とする現代では、はるかに遠い日本と経済だけではない強い絆で結びついている。

各国が秘密裏に日本に向けている核兵器について、公表せず

にはいられなかった。自国民を日本から引き揚げさせるための公表でもあった。が、それ以上に、国民の合意を持って、日本に、あるいは各国に警鐘を打ち鳴らしたかった。先祖から受け継いできた、良心を持った国家と称される自尊心がある。核兵器のボタンに指を乗せながら、事の成り行きを見守っている国々を、糾弾しなかった。彼らを衆人環視の前に引きずり出すとした。

インターネット・ジェンスコミュニティは、世界各国で急激に力を持つてきた機関である。二十年前には考えられもしなかったテクノロジートともに育ってきた。どの国のインターネット・ジェンスコミュニティも内部にダブルエージェントを抱えている。他国の機密を探り合う情報戦の中で、彼らが世界の表舞台に出る事は、存在そのものと合致しないとされていた。

それが初めて、この情報をはっきりした根拠のあるものと認め、後押しする発表をした。その日の正午のことである。

午前、戸惑いとともに、口々に不安をもらしあっていた人々の心が、そこからひとつの方向に流れ始めた。各国の報道機関がそれを作った。

一つ目は白居家の中にあつた。

早朝から白居家の森を一扫しようと、自衛隊員が踏み込んだ。彼らは一人の男の死体を発見した。はなから報道陣が詰めかけていたのである。現場は、そのまま映し出されてしまった。庭に埋められたその男が、戦場カメラマンであつたこともすぐに

調べ上げられた。

今まで、顧みられることもなかった男の写真。それが映像に映し出される。砂漠でたくさんの写真を撮っていた。飢餓にさらされた赤ん坊や菓の足りない子どもたちを。写真の良し悪しとは別に、彼の手柄がにじみ出ていると評される。

その中に、射殺され穴に突き落とされた、多くの民間人の虐殺の写真があった。暴動を指揮しテロ支援を行って、政府軍に追われていた塚田瑛佑。彼が匿われていた村が全滅した時の写真であった。

それを写したカメラマンの死体が白居家から発見されたのである。

心優しい正義感溢れる戦場カメラマンが誰かの闇を掴んで殺された。そう考えるのが人の想像力というものだろう。ましてや、死者は報道する側にいた。今、それを伝えようとする人間たちの同胞なのである。あきらかな病死であることを握りつぶしたのは、警察なのか官僚なのかマスコミなのか。

二つ目は、その直後。PDFLの議長を暗殺した男の死がニュースになった。

暴動に巻き込まれ、護送車ごと大破した。完全にタイヤを上に向けてひっくり返った護送車。黒く煤けた車体から今もくすぶった煙があがっている。後味の悪さの残る映像だった。

ニュースは、その次に、その中で焼け焦げて死んでいるであろう犯人の写真を見せた。青い空の下、青年に抱き上げられて

笑っている幼い両手の無い少年。その笑顔を見たなら、人の憎悪は、そんな子どもを暗殺者に仕立て上げた組織に向かう。

抱き上げている青年が塚田瑛佑であること。瑛佑がサクヤグループのエージェントであること。彼はかつて、今世界中の耳目を集めるテロの巣窟、白居家に住んでいたこと。やつぎばやに事実が挙げられていく。

事実と真実の違いはどこにあるのか？

報道によって、流れは決まった。白居家には、花里には、攻撃されるだけの事実がある。

そして、被弾する側の人間たちまで、その事実を認めてしまった。白居家を中心とする三十キロ四方から人の姿が消えた。あつという間のことだった。

もちろん、絶対に避難する気はないと主張する頑なな人や一人では動けない人もいた。だのに、避難はスムーズだった。街に、銃を持った異国の顔の集団が現れて、一言もしゃべることなくそういつたやつつかいな人間を連行していった。銃をつきつけて有無を言わさぬ勢いである。避難することに高を括っていた人々も、そのものものしさに恐れをなし、慌てて街を出て行った。学校・仕事場・公共の機関も避難に協力的だった。明らかに上のほうから、指示が出ている様子だった。

頼子の夫も、患者に付き添って避難して行った。海老沢病院

からも患者たちを他の病院へ移送した。

豆腐屋は避難しないと言い張る頑なな輩の一人だった。彼を連れて行ってくれたのは、近所の青年だった。海老沢病院の玄関マットなどを配送する会社に勤めており、ここに豆腐屋が担ぎ込まれたことを知っていた。

「僕はお豆腐屋のおばさんのお蔭でここまでやってこれたんです」

彼がそう言っても、豆腐屋は首を縦には振らなかった。

「あいつが世話をしたものに、どうして俺が世話になっていいんだ」

豆腐屋は真剣な顔でそう言った。

「本当は母親や父親や、あいつを可愛がった人間がしてもらおう親切だよ。おれじゃない。おれじゃないよ。おれはあいつにしろもらうばかりで、なんにもしてやれなかったんだから」

海老沢が青年に助け舟を出した。

「あなたが奥さんの分を受け取らないと、この若者はあんたみたいに誰に恩返ししたらいいんだか、わからなくなっちゃうんだよ。受けときなよ」

日が沈む頃、消防・警察関係者が街を見廻り、無人になってる事を確認して去って行った。残っているのは、自衛隊と報道関係者の一部だけになった。

森は薙ぎ払われている。無人の木株ばかりの森を、カメラが

全世界に配信している。

(核のボタンを押すな！)

(この地から消失が始まることなどありえない！)と主張する。

太郎は膝を抱えて蹲っていた。通路から異国の兵士に連行された人の集団が入ってくる。その度に、顔を上げて確認するが、また俯いて丸くなる。

中央は、だだっ広い広場ようになっていた。銃を構えた男たちも、そこまで来ると険しい表情を解いた。異国の顔が偽物であるような、流暢な日本語を話す者もいる。集められてくる人々は背負われていたり、車椅子であったり、年を取りすぎていたり、避難の難しい者が多い。

やがて、上部に取り付けられたモニターから、開眼大悟が話しかける。

「手荒い真似をして申し訳ありません。しかし、未曾有の事態であることをわかって頂きたい。家に残りたいとか荷物を持ち出したいとか、個人の事情を聞いているわけにはいかないのです。

国には、みなさんを守る義務がある。

食べ物や備蓄はあります。透析の必要な方、薬の必要な方、持病のある方、妊娠中の方は、その旨お知らせ下さい」

ある程度の人数が集まると、この映像を見せてから各々の休

めるエリアへ連れて行くようだった。

太郎はタズを待っていた。伽耶子の死顔が目には焼き付いて離れない。母親である事を辞めてしまった伽耶子。本当はもうずっと前からタズと二人きりだった気がする。それでも、諦めきれずに伽耶子が母に戻ってくれる日を待っていた。今、もしタズまで死んだら……。

人の波が途絶えても、ついにタズは現れなかった。太郎は決然と立ち上がって、コウタに連れられて来た道を反対に歩き出した。

「待って！」

追ってくる者があった。コウタだった。

「戻ってはいけない！」

「タズさんがまだなんだ」

「エースケから、もう地上に出てはいけないと命令が出ている」

「でも、タズさんがいないんだ」

「エースケの許可がなければ、地上への扉は開けられない」

「じゃあ、瑛佑さんに頼んでくる」

「だめだ」

「なぜ？」

「そんなことしたら…… そんなことさせられない」

言い争う二人の前に瑛佑が現れた。

「瑛佑さん」

必死の表情で太郎が口を開こうとすると、

「今、連絡がとれた。タズさんは海老沢先生たちといっしょにいるらしい」

タズは、森が、木々が上げる悲鳴に耐え続けた。むしろ耐えきれなくなったのは、夕暮れ、なんの音も聞こえなくなってきた。いつのまにか、誰一人姿の見えない世界に取り残されていた。明彦の苦しい呼吸だけが、この世界の音だった。

「もうどうなっても仕方ない」

その言葉をタズの体が裏切った。明彦を失う事が、世界を失う事より、自分を失う事より、怖くなった。携帯で海老沢に連絡をとった。

海老沢はすぐに駆けつけた。休場がいっしょだった。彼は明彦を負ぶって病院に運び込もうとした。が、病院には人影があった。昨日明彦の命を狙って銃を撃った男たちだ。

だから、明彦を透子の部屋に運んだ。海老沢病院と自宅の間に建てられた棟。昔は、病棟に使われていたが、廃屋となつて久しい。

透子の眠っていたベッドに明彦を寝かせた。

休場と海老沢は手当するための薬を取りに病院に忍び込んだ。タズ一人が、明彦のもとに残った。

そこに、笹原が姿を現した。もちろん、ここに明彦がいるなどとは知る由もなかった。しかし、今の笹原にこの偶然は、必然と思えなかった。

「笹原さん」

タズは、彼が現れたことに疑問を抱かなかった。ここは彼の住まいだったのだから。

「明彦さんが突然帰って来て」

むしろ、明彦とタズが今ここにいることを説明しようとした。けれど、笹原は静かに首を振ってそれを押し止めた。

「わかってます。きつと透子と呼んだんです」

笹原はゆったりとソファに腰を下ろした。かつて、透子がベツドに眠り、笹原がここに腰を下ろし、部屋の間にある流し台で弓子が食事を作った。追いつめられて崖淵に立って、苦しただけだったはずの日々を、なぜ自分はこのなにも懐かしく思い起こすのだろう。

「動的平衡という言葉が、あの頃いつも頭の中に取りました」

笹原はタズに話すともなく、語り始めた。

可愛い透子。赤ん坊だった彼女は、少しの乱れもなく配列された細胞に覆われていた。つややかな美しい肌。青いほどの白さに縁どられた黒い眸。精緻に作られたピンクの爪。時はそれらに少しの無秩序も与えることなく、成長させてくれた。

だのに、狂い始めたのはなぜだ。

川には水が流れている。今そこにある川の姿は一分前の水を見ているわけではない。それでも変わらぬ姿を維持している。

動的平衡。

透子の動的平衡はどうして崩れてしまったのか。なぜ、透子

のDNAは手や足を作る事を忘れてしまったのか。……連日その事を考えていた。

考え続けて家に帰る。弓子の待つ家は、幼い記憶にあるアパートとは大きく違う。あの膿み崩れていくだけだったアパートの一室。食べ棄てられた食品パッケージはそのまま変色する。サッシの縁はカビに浸食される。汗と皮脂のついた布団から蛆が湧く。時が無秩序を増大させ、部屋は朽ちていった。

弓子の待つ家は、崩壊も無秩序もよせつけない。泥のついた靴で玄関を汚しても、毎朝磨かれた靴の並んだ玄関に戻っている。ほこりも積もらない。空気も澄んでいる。そして、決して枯れない花がある。いつ見てもいきいきと咲く花。

笹原が

「何が？」

と、尋ねると

「これはね、マーガレット」

と、弓子は花の名を答えた。

睡眠が、彼にもうそれ以上の質問をさせなかった。

「ふうん」

笹原は眠りに落ちていった。夢の中で、透子に水をかけると、手や足が生えてきて、普通りにクスクスと笑った。

透子の動的平衡は、どうして崩れてしまったのか。弓子は、毎朝窓を開け、掃除し、花を活ける。家は弓子そのものだ。彼女が動的平衡を守る。それなら、透子の狂いは自分のせいだ。

弓子のはずがない。罪は、無秩序は、禍は、常に我が身にある。笹原は怯えた。

「何が？」

弓子に尋ねたかった、何が違うのだろうと。どうして自分にはできないのだろうと。

その弓子は死んでしまった。あの時刻、自分は何をしていた。

弓子の夢を見たか？ 彼女の声を聞いたか？ 彼女のことを考えたか？ 何もない。何もない。

家でパソコンを操作している時、携帯でしゃべっている時、弓子は廊下の隅で蹲すまって痛みに耐えていたのかもしれない。

何も気付かなかった。死の瞬間さえも知らない。葉子の言葉通りだ。振り向きもせず、枯らせてしまった。すべての非は自分にある。

「タズさん？」

疲れが出たのだろう。タズはいつのまにか椅子に座って、壁に寄り掛かったまま眠っていた。

笹原はベッドにあがった。明彦の体に馬乗りになって、両手を首にあてた。力を入れるとぐぐうと咽ど喉どがなった。明彦の目が見開かれた。自分を殺そうとする相手を見つめる。

笹原を認識している。その目は不思議そうだった。

（なぜ？）

と、言っている。笹原も、明彦の目を見つめ返した。

「もういい。おまえのいるべき場所に帰って、おまえのなすべ

きことをすればいい。この宇宙を消して、すべてをゼロにもどすがいい」

明彦の顔が苦痛にゆがむ。空気を欲して、両の手が宙を掻く。

「留まる必要はない。留まる価値はない。今、殺さなくても、いずれ殺される。遅いか早いかそれだけだ。それなら、もういいだろう。」

人はもうどうにもならない。どうにもならない進化を遂げた。たとえ、バビロンの塔を打ち壊したように文明を破壊しても、すでに手遅れだ。心が壊れている。自分が今何を踏みにじっているのかにさえ気付かない。

核によって、放射能によって、透子のように苦しむ子どもが現れる前に、卵のままの姿で死んでいく赤ん坊が生まれる前に、すべてを終わりにしよう。

これが私の選択だ」

籠められた力に、明彦の首が軋む。もがき暴れる両の手が力を失う。その手は、縋るように笹原の目に触れ、頬をなぞって落ちていく。

タズが目を覚ました。

「何をするんですか」

笹原をとめようと縋ったが、払われた手で一瞬に尻餅をついた。立ち上がろうと慌てても、打った腰に力が入らない。

「やめて下さい。やめて下さい。お願いします。お願いします」懇願するしかない。

「透子のような子が、もう生まれてはならないんだ」

明彦の目が諦める。何も見なくなる。

ガタンと戸口が鳴った。

「おじさん！」

ピンポン玉のように、力まかせに笹原にぶつかっていくものがあった。無鉄砲に弾みのついた体は、笹原とともにベッドを飛び越え反対側の床に落ちた。

太郎だった。

「太郎ぼつちゃん、どうしてここへ」

タズが驚く。

「タズさんが来ないから、戻って来たんだ」

戸口には瑛佑も立っていた。

「笹原さん、一体どうしてこんな！」

正気を取り戻さない亜子を避難させることは難しかった。亜子の狂気は人を不安にする。それでなくても、一人の悲鳴でパニックを引き起こしそうなこの状況下、秩序を維持するためには細心の注意を払わねばならない。

亜子と頼子は、最後まで海老沢病院に残ることになってしまった。夕方、あれほどの伐採の音が止むと、静寂が訪れた。殺されていく木々を感じ続けた亜子は疲労困憊の中にいた。いつしか眠り込み、やがて、目を覚ました。そして、
「先生、いっしょにいてくれてありがとう」

と、頼子を理解した。正気を取り戻した。

頼子は何をどこまで亜子に伝えたいのか迷った。まだ十三歳なのだ。今この状況を把握するにはあまりに幼い。

「海老沢先生と休場さんから、迎えに来るまでここで待てるように言われているよ」

次の言葉を考えていると

「先生、先生はだんなさんのこと好き？」

唐突な質問だった。

「まあ、結婚したぐらいだからね」

「私は誰の事も好きにならない」

「そう」

これはどう答えたらよい問いなのだろう。

「私の本当のお父さんは、明彦さんという伽耶子さんのお兄さんなの。先生知ってる？」

弓子は、母親が男と失踪したために、口をきかなくなったしまった亜子を心療内科医である頼子のもとに連れて来た。亜子の心に負担をかけたくないから、ボランティアの手伝いをするという名目で、治療のことは伏せて通いたいと言った。

けれど、弓子よりずっとこの白居家の不思議に関わっている頼子は、何もかも知っていた。雪那の口から、弓子の知らない亜子の母親の消失を聞かされていた。亜子の治療にはどうして必要なことだった。亜子は消失を見た。そして、嘘をついた。
「亜子ちゃんは明彦さんに会ったことあるの？」

「一度だけ」

「いつ？」

「覚えていないぐらい小さい頃」

「覚えていないの？」

亜子は一度躊躇い、次には思い切った様に早口に捲くし立てた。

「覚えてる。ホントはすっごくよく覚えてる。だから、映像だけでもすぐにわかった。太郎君に教えてあげた。あそのコンビニに行けば会えるよって」

「そのとき、太郎君に教えてあげて、亜子ちゃんが行かなかったの？ 会いたくなかったの？」

「行ったけど、会えなかった。次の日は行かなかった。どんどん怖くなつて、恐くなつて行けなかった。恐かった、ものすごく怖かった！」

亜子のテンションはどんどん上がって行く。頼子は危ないと思つた。話題を変えようとした。

「亜子ちゃん、学校はどう？ 楽しい？」

そんな言葉は、すでに亜子の耳には届かない。

「確かめたかった。でも、会うのが怖かった」

「亜子ちゃん、無理に明彦さんの話をしなくいいから」

「話さなくちゃ。話さなくちゃいけないの。このまま隠してはられない」

亜子の体が震えだす。

「いいのよ。話さなくていいから」

「いや、聞いて。お願い、先生聞いて」

亜子の声が悲鳴に変わっていく。

「わかった、わかったわ、聞くから。聞くからね」

亜子の目は、一点を見つめたまま動かない。

「行かないでって言ったのに、待ってって言ったのにお母さんは出ていった。むりやり明彦さんの手を引っ張って。いやがる明彦さんを引きずって。

鬼だ。床の間の鬼のお面。つりあがった目も、めくれ上がった唇も、明彦さんを掴む手も！ おかあさんじゃなかった。髪を振り乱して角をはやした、牙を剥き出した醜くて恐ろしい鬼。あんなにやさしいおかあさんが鬼になつてた。

わかつたよ。亜子より明彦さんがいいんだ。亜子がどんなに頼んでも、おかあさんは明彦さんと行きたいんだ。そんな怖い顔になつても行くんだ。好きだから。男の人を好きになつたから？ 違うよ。だって、その人はおかあさんといつしよに行きたがってないじゃない。それでも、それでも行くの。亜子をおいて、行くの！」

亜子は泣きじゃくつた。

「消えちゃえて思つた」

頼子は亜子を抱きしめた。

(なぜ、この子のかたわらに、それを叶える力が存在したの) そして、祈つた。

（人はたくさん間違いを犯します。間違いを犯しながら大人になつていきます。それなのに、何故この子にそんな大きな咎を負わせたのでしょうか。この子になんの罪があるというのでしょうか？）

休場は部屋に入つて来た。

「今のは？」

休場は亜子の言葉を聞いていた。

「おそらくあのときの消失は……」

（亜子ちゃんが明彦さんの力を使った。亜子ちゃんが引き起こしたの）

口には出せなかった。でも、言葉にしなくとも休場は頷いた。

「雪那さんもそう言つてました」

そして、亜子に話しかけた。

「亜子ちゃん、君はあのととき小学一年生の小さな子どもだった。だからそう思い込んだのは仕方ないけど、今はもう中学生だ。

人間が人間を消したりできないのはわかるだろう？ 人にそんな力はないんだ」

休場は亜子の頭をなでた。そして、

「さあ、行こう」

二人を促して、部屋を出た。

明彦を手当てするための薬を抱えた海老沢はバツタリと武装した男たちに出くわしていた。先頭にたっているのは、ユージン

ン・ムーアだった。

「あなたが自らおでましとは、普通親玉つていうのは後ろに控えているもんじゃありませんか？」

海老沢の言葉に

「正義の味方つていうのは、そんな楽なもんじゃありませんよ」

ユージン・ムーアは答える。

「くだらない」

海老沢が吐きだすように言った。

「正義の味方がですか？」

ユージン・ムーアはぞつとするような笑みを浮かべた。そして、海老沢が答える間も与えず、

「私もそう思いますよ」

と、自ら答えた。七年前初めて会ったときとずいぶん印象が違ふ。異形になつていて。鬼気迫るものがある。こんな場面で出会ったのだ。当たり前のことかもしれないが。

「あの日の赤ん坊は、この東京にいた。白居明彦は赤ん坊の眷族けんぞくですか？ いや、違う。あの目も鼻もない赤ん坊は何度でも生まれ変わるんだ」

「あんたは、何を言つてるんだ！」

「白居明彦の所へ案内してもらおう！」

「馬鹿馬鹿しい！ こんな物騒な奴らをどこへだろうが、案内なんてできない」

海老沢は銃を持つ男たちを指さした。そして、ギクリとして

その手が止まった。

廊下の向こうから、その物騒な男たちに引き出されてきた者がいた。亜子と頼子と休場である。

「海老沢先生！」

休場が助けを求めるように呼ぶ。

海老沢はため息をついた。なんて安易な展開だ。

「休ちゃん、もう少し登場の場面を選べなかつたのかね」

休場には、海老沢の場違いに楽天的な台詞に、答える余裕はなかつた。

透子の部屋で、太郎は笹原に対峙していた。

瑛佑とタズが、二人を見つめている。

「亜子ちゃんのお父さん、うううん、透子さんのお父さん、僕、

透子さんに会いました」

笹原は、太郎の顔をまじまじと見た。

「透子は、君が生まれるずっと前に死んだんだよ」

「わかつてます。でも、昨日会ったんです。ベッドに座つてあの窓辺にいた。友康おじさんが言ったように」

「友康がなんて？」

「透子さんは生きていたつて。友康おじさんの兄弟は生まれてもこなかつたけれど、透子さんは生きていた」

太郎は伝えようと必死だった。

「何を言っているんだ」

「生きて、窓から入ってくる風を心地よいつて感じていました」

笹原は息を飲んだ。透子の気配が伝わってくる。

この部屋に確かに透子は生きていた。そして、本当に太郎が言うように窓辺で微笑んでいたことだろう。

太郎は、一歩笹原に近づいた。手を差し伸べて笹原の手に触れた。

「この手も知っています。透子さんは、目も耳も言葉も失つて、手も足もない体でベッドに横たわっていた。毎日、この指が胸になぞつた文字も知っています。」

『おはよう』

『おやすみ』

『ここにいるよ』

透子さんはこの手が大好きでした」

笹原には言葉もなかつた。太郎は笹原の手を握りしめた。

「透子さんが生きていた時間を悲しまないで下さい」

なんの前触れもなく、部屋に男たちが踏み込んできた。銃を構えた男たちである。

「君たちは何なんだ？」

問うまでもなく、すぐに、ユージン・ムーアと、引き立てられた海老沢たちが姿を見せた。

乱入者は、笹原や太郎には何の関心も示さず、銃口はすべて、明彦へ向けられた。

やっと息を吹き返して、ベッドに半身を起こした明彦は、なんの驚きもない目でそれを見ている。高野洋二に殺された時の伽耶子のように、なんの恐れもないビー玉のような目。

「正義の味方のすることではないな」

笹原は言った。

「地球を救うために」

ユージン・ムーアが答える。

「それは間違いだ。彼を殺せば、全てが終わる。」

こんなことすぐにはわかってくれと言っても無理だろうが、彼は終末の神だ。人の器に囚われている。彼をこの器から解放すれば、彼はこの世界を、全宇宙を消すだろう」

「この器のままでも、消したじゃないか。あれほどの人を、物を、すべてを！」

「そりゃあ、全宇宙の終末が彼の運命なのだとしたら……」

海老沢が口を挟む。

「あの程度は仕方ないか！ たいしたことではないか！ どれほどの命が失われたと思ってるんだ！」

ユージン・ムーアが怒りに震える。握りしめた手に爪が食い込み、血が流れる。

「なぜだ？」

笹原が問うた。

「驚かないのか？ こんな奇妙な有り得ない話になぜ？ 終末の神だぞ！ 馬鹿馬鹿しくて涙が出る。こんな取るに足らない

ちっぽけな人間が何を語ってるんだ！」

「……」

ユージン・ムーアは押し黙った。

笹原は驚きの目で彼を見つめた。

「そうか、あなたは知ってるんだ。彼が終末の神であることを」

ユージン・ムーアは黙して語らない。

「俺は今、明彦を殺そうとした。すべてが消える事を望んだ。

ハハハ」

笹原は笑った。

「なんだ、あんたも同じか。知っていて銃を向けるのか。同じ穴の貉か。どこが正義の味方だ。本当はすべて消えてくれと願ってる！」

「何を言う！」

ユージン・ムーアは銃を構えた。

「そんなこと望んでいない！」

銃口を笹原に向ける。

「それを防ぐために生きてきたんだ。何十年もその為だけに！」

引き鉄に指がかかる。

「おまえなんかと同じにするな！ いまさら、なぜ、おまえのようなものにそんなことを言われねばならない！」

亜子が飛び出して笹原の前に立った。

「お父さんを撃たないで！」

ユージン・ムーアは、亜子を突き飛ばし、笹原を銃の台座で

叩きのめした。それでも納まらない怒りが体から沸き立つ。幽鬼になりはてたユージン・ムーアの絞り出す声が、周りの人間の背筋を凍らせた。

「正義の味方。そこに突き進むことがどんなに安易な、幸いなことであつたか」

彼は、自らを嘲笑っている。

「愚かしい女だ。愚かしい」

涙を流しながら自らを笑う。意味不明な言葉。狂っている。

亜子が起き上がった。ユージン・ムーアに取り纏る。

「おじさん、違うよ。お母さんを恨まないで。お母さんは良い人だったのよ」

ユージン・ムーアの心を言い当てた。彼は茫然と亜子を見つめた。

「休場のおじさん、さつきおじさんが亜子に言ってくれた事、この人にも言っておあげて」

「さつき言ったこと？」

「亜子は、あのおとき小さな子どもだったから仕方なかったんだって言ってくれた。人間が人間を消したりはできない。人にそんな力はないんだって、そう言っておあげて」

瞬間、休場にも笹原にも、理解できた。おそらく、ユージン・ムーアにも伽耶子の夜が訪れたのだ。

その通りだった。

ユージン・ムーアは昨日の夜、再び消失の日を味わった。今まで何度も悪夢を見た。でも、昨日こそが最上級の悪夢だった。真実の姿を見てしまったのだから。

終末の神をこの地に留めるのが人の使命。子どものおときユージン・ムーアが森の中で見た焚火を囲んだ人々。彼らは一言も話さぬまま、お互いのDNAに書き込まれたその任を確認し合っていた。十三歳の少女に赤ん坊を生ませねばならない。入出力のない目も耳も言葉もない赤ん坊。空から落ちてきた何もものをその赤ん坊に封じ込めるのだ。生きたまま冷凍庫に入れて。

悪夢の出来事としか思えなかったに違いない。日常からはあまりに遠いおこないである。人の母でありながら、医師でありながら、生きた赤ん坊を冷凍庫に入れた。なぜそんなことをしたのか、自分の心に聞いてもわからない。彼女の人生は、彼女自身にとつてこそ、最も不可解なものになってしまった。

年老いて、理性と記憶を失ったとき、その罪悪感だけが彼女を責め立てた。彼女は恐れ慄きながら生きなければならなかった。小さな子どもが闇を恐れる様に、一人になることを恐れる様に、自分の罪が自分に追いつき、あの赤ん坊がいつか自分に復讐しにくる事を恐れた。

彼女の老いは、彼女の崩壊を生み、ついにその日がやって来た。彼女の恐怖が赤ん坊を呼び出し、復讐の刃が振り下ろされる妄想が赤ん坊の力を引き出した。

コウタたちは、透子の部屋を取り囲んでいた。部屋の中の様

子を窺う。銃を構えた男たちが押し入っているのが見える。瑛佑は、太郎のために地上へ出て行つた。この非常時にである。太郎が、タズを迎えに戻ると言い張つたからだ。

こうなることは、わかつていた。だから、太郎にそれを言わせたくなかつた。瑛佑の耳に入れたくなかつた。瑛佑はいつでも人の望みを叶えようとする。まして、相手が子どもであればなおのこと。それが大人の義務だと思つている。

『いつ攻撃が始まるかわからない。太郎には僕が一人で付いて行く。おまえたちはここで待機している』

コウタたちに、瑛佑はそう言い置いた。が、コウタたちが彼を一人で行かせるはずがない。瑛佑の言うことは何でも聞く。でもそれは、瑛佑の身の安全が保障されてのことである。

瑛佑に何かあつてはならないのだ。

コウタたちには、もう何も無い。国も宗教も故郷も家族も、何もかも捨ててここに来た。見捨てざるを得なかつた多くの同胞の想いを背負つてここに辿り着いた。瑛佑だけが彼らの望み。瑛佑とともに生きる。それだけが生きる答えだ。

彼らにはここに辿り着けただけの運がある。ストイックであることは当然。動きの素早さとの確な判断力は必須。自分を鍛え続けることにしか、意味はない。そうでなければ、大事なものは守れない。瑛佑を守るのはいつとも至難の業だ。

ユージン・ムーアの引き連れる九名の銃を持つ男たち。それを見つめるコウタ達の目は、プロの戦闘集団の力量を測る。失

敗は許されない。この狭い部屋を制圧するのに時間はいらぬ。一瞬ですべてが決まる。

「私はなんのために生きてきたんだ。すべてが幻だつた。自分の母親の大罪も知らず！」

ユージン・ムーアが嘆く。

『本当はすべて消えてくれと願つてる！』

笹原が言つた事は正しい。すべてに消えて欲しかつた。ユージン・ムーアにとつて、真実は耐え難いものだつた。

ここにいる事情のわからない人間たちにとつて、ユージン・ムーアは、世界に跨る組織を作り上げ、強い信念と共に生きてきた人物だ。それが、なぜこのような振る舞いに及ぶのか。世界を救うという信念に、どういふ紛れが生じたのか。戸惑わずにはいらぬ。

「ただ、滑稽さに腹をよじるしかない。自分の人生を笑わずにはいらぬ。張本人の息子が高らかに、人々を鼓舞してきた。

『地球を消失から救わねばならない』と」

ユージン・ムーアに叩きのめされ、血を流した笹原が起き上がつて、一步にじり寄つた。休場が阻むように立ち塞がつたが、笹原は静かにそれを押し退けた。

「そうですね。伽耶子さんが死んで、真実を見てしまふ一日前に、あなたは正義の味方のまま死んでいれば良かった」

シニカルな表情を浮かべる。

「でも残念だが、そうはならなかった。この日があなたにやって来た。お蔭で私はやっと、正義の味方であつたあなたの三十年を、うらやむことをやめられる」

「ううっ！」

笹原の痛烈な皮肉に、今度こそ、ユージン・ムーアは、彼を銃で撃ち抜こうとした。その手に、瑛佑が飛びついた。

同時にコウタたちが銃を持つ男たちに飛びかかる。確かに、あつという間の勝負だった。ナイフ、手裏剣、ボーラ、流星錘、吹き矢。彼らの使う得物も様々だったし、技が何であるかは見てもとれなかった。一瞬のうちに完全に敵を制圧した。

「いつのまにそこにいたんだ」

休場が舌を巻く。

ユージン・ムーアだけが、瑛佑に抑えつけられながらも、口汚く罵り続けている。

海老沢がことさら穏やかに、そんなユージン・ムーアに話しかけた。

「そんなに怒らないでやってくれ。こいつは分別臭いおっさん面してるけど、中身はガキなんだ。まったく失礼極まりない、とんでもないことを言うガキだよ。相手にしないでくれ。」

あんたの母親がどうあろうと、あんたが三十年やってきたこととは正しい。正義の名に値する。

ただ、その間ずっとこいつは、劣等感に苛まれていた。あんたは、もう古い先短いじいさんになつてる。ここまで十分立派

にやってきたんだから、もう正義の味方の役を交代してやってもいいんじゃないか」

明彦がゆらりとベッドの上で立ち上がった。緩慢なたゆたう動作。全員の目が彼を見る。圧倒的な存在。すべてが頭を垂れる存在感。何より透明で、何よりそこにある。

突然、壁が破れた。窓枠ごと木端微塵に砕け散る。外の風景を目の当たりに見せる大きな穴。それはやがてびりびりと空白の輪を広げ、この部屋六面体のひとつの面を完全に打ち抜いた。明彦の体は浮かび上がり、外の空間に引き摺り出されて行く。

全員が部屋と外界の淵に立って、それを見た。透明な数限りない触手がこの部屋に向かってくる。何もかも無くなつたはずの森が、幽気に満ちている。木の切り株から、無数の透明な触手が伸びている。森はその触手によって、かつて生きて存在した以上の密度を紡ぎ出す。

地に縛られていた彼らは、自らの死を受け入れ、解き放たれた。森の木々は細胞壁を失い、自由を手にした。それらがすべて明彦を求めている。彼がどんなに抵抗しようとも、透明な触手は無慈悲に彼をからめ捕る。

煌々と輝く満月。

そこに高々と掲げられた人形は、

月の神への生贄。

美しい生贄。

抗う生贄。

笹原は走り出した。

「後は頼む」

そう瑛佑に言い置いて。

休場がそれを追った。

切株から天空に向けて伸びる透明な触手。木の枝のような根のような、しなやかな蔓。木の霊が、怨嗟うんさの声をあげている。友康が言ったように、木は人を恨んでいる。誇り高き彼らが、足元に蠢く人間ごときに、たいした寿命も持たぬ小賢しい生き物に、切り倒されるしかなかったことを呪っている。

休場には既視感があった。

「そうだ、これは雪那さんの童話の中の世界だ。天から落ちてくるものを待ち続ける植物の話」

彼らのもとから憤っていたのかもしれない。創世の神が木々に課した使命。人間がそれを横取りした。彼らの誇りは、はなから人間を憎んでいた。

明彦は、透明な触手に抗い続けている。人の器は、あまりに非力で甲斐がない。それでも、明彦は抗い続け、どこまでも抗い続けて、力を失った。もう指一本動かぬほどに疲れ果てた。月光を浴びて、彼の黒髪はますます黒く、肌は白く澄んでいく。消えた。

突然、空の領域が増えた。

目の前の、風景が消えた。

地平線が見える。

笹原は心臓に何か突き刺さったような気がした。どくりと血が逆流したのだろうか。視覚の衝撃が体を打ちつけた。消失が始まってしまった。

でも目の前の消失は、あの映像とは違う姿をしている。細かい。角度が違う。あの映像では、百八十度に近い角度で、一瞬にしてすべてが消え去った。今、笹原と休場の前に出現した消失は、火矢が飛んだ一筋のようだった。明彦の前、十度程度の角度しかない。

ただし、徐々に広がっている。消失は十度が、十五度に、広がろうとしている。呪う木々の為すがまま、すべての力を使い果たしたように見えた明彦だったが、それでも抗い続けているにちがいない。

ユージン・ムーアの考察は間違っていた。かつては、赤ん坊だったがゆえに、力を引き出されてしまうことに対抗できなかった。自分の持つ力の存在さえ認識できなかった。明彦という人の内で生きた彼は、抗っている。今の器の非力さにのたうちながら、それでも抗っている。明彦という人間として生きた時間、抗う力を生んだ。自分の力が振るわれる事を止めようとしている。

それでも、消失は再現されてしまった。

笹原が、休場が見たそのままが、今まさにカメラを通して世

界中の人々の目に映ったのだ。間違はなく、攻撃が始まる。遠く人の祈りが聞こえる。祈りを捨てたはずのコウタたちの声だった。

『もう我々人の力ではどうにもなりません。神様、お助け下さい』

砂漠の民の祈り。捨てたはずの祈り。

笹原は天を仰ぎ見た。

（伽耶子は明彦を待っている。彼らが神であるなら、神に祈るなど無駄なことだ）

それでも、笹原は再び走り始めた。

（無駄な神への祈りか。その通りだ。確かに人の力ではもうどうにもならない。無駄でも……願わずにはいられない）

笹原は走り続けた。心臓が破けるほどに走って、桜の古木の前に立った。

木は無残な姿に成り果てていた。古木を薙ぎ倒そうとした、引きずり倒そうとした、人の攻撃の痕が刻まれている。根を断ち切ろうと土を掘った痕。電動鋸で幹を刻んだ痕。枝はすべて打ち落とされ、生皮を剥がれている。

それでも、かろうじて立っていた。この木だけが生き抜いた。

笹原は手を伸ばして木肌に触れた。ドクドクと脈打つのは木の鼓動なのか、自分の鼓動なのか。

「わかっている。どれほどの身勝手か。どれほどの恥知らずか」
笹原は膝を折って、幹を抱いた。

「それでも、もうお前に頼むしかない。どれほどにも謝ろう。この身を八つ裂きにしろ！ お前の気の済むように」

震えながらに言葉を紡ぐ。

「葉子が幼い明彦をお前の腕から取り上げた。あの時からすべてが間違っていた。お前こそが正しかった」

喉に重い鉛を詰めたかのような語りだった。

「終末の神をこの地球に留めおくなど、人間の出来る事ではなかった。お前こそが正しい。創世の神の意志を継ぐのは人ではない、お前だ。明彦を止めてくれ。そして、この地に留めてくれ！」

どうしたら、言葉が通ずるのか。この木を動かすことが出来るのか何もわからない。でも、もう自分たちにはどうにもならない。いにしえより生き続けたこの木の叡智えいち、この木の力に縋るしかなかった。

風が吹いた。つむじ風のように唸りをあげる。くるくるとまわって空に伸び上がって行く。まるで、この森の統治者が、全兵士に号令をかけたようだ。

呼応する。透明な森の触手、空に向かって伸びていた木々の霊が道を開いた。モーゼの海のように、森を埋め尽くして揺れていた霊たちが左右に分かれた。

「なに？」

笹原の目に、桜の古木の根がその開かれた道をするすると走って行くのが見えた。巨大な蛇のように這って行く。

木の霊たちに祭り上げられた明彦に向かって、飛ぶような速さで駆けて行く。そして、その根元に着くと、今度は空に向かってそれまで以上の速さで駆け上がった。

ぞくつと笹原の背に悪寒が走った。

根は明彦の体を貫いた。

瞬間、笹原は地に倒れ伏す。

明彦の、今感じている苦痛が彼に届いた。明彦の股間から、根は背骨に沿って駆け上がった。すべての神経をずたずたと裂いて走り抜ける。激痛は目を眩ませる。耳をつんざく。喉を食い破る。意識は全く途絶えない。どこまでも痛みは続く。死を願ったのだろうか。いや、そんな考えさえも生まれない。ただ許しを請うだけだ。この苦痛から逃れたい。

(助けて)

(助けて)

(助けて)

やがて、根は明彦の首筋から外に出た。後ろ首の付け根から、血に塗れてぬらぬらと、月の光を浴びながら。

明彦の中にあつた赤い血液は、貫かれた股間から流れていく。どろどろと根を伝って地面まで。べったりとした血溜まりが地にゆるゆると膨れ上がって面積を増していく。

(た・す・け・て)

明彦という個体が何かを失っていく。ひとつひとつの細胞が萎んでいく。

(た・す・け・て)

苦痛は明彦が人であつた名残。それも薄れていく。

(た・す・け・て)

最後の一滴は、明彦の目から落ちた。赤い涙。

なにかがながれている。

なにかがみたしている。

明彦の萎んだ細胞を満たしている。切り刻まれた神経を修復してゆく。ささくれだつた内部が穏やかに目をつむる。睡魔はやすらぎ。

古木の根は何を注ぐ？ それは樹液？ それは涙？ それは生命？ 流れ出た血のかわりに、木の精が注がれる。

明彦の唇から深い息が吐かれた。

それを最後に彼の瞳は閉じられ、眠りに落ちていった。

大事な赤子を抱くように、木の根は明彦を包み込んだ。その

ままするすると戻って行く。もとの、桜の古木のありし場所に。

透明なうなだれた霊たちの間を通して。

木々の王が彼の使命を果たして帰還する。空から落ちてきた者をその根に捕らえた。それこそが彼の使命。彼の誇り。彼は地中深く明彦を抱きしめた。

夜が明ける。彼方に核ミサイルの影が見えた。